

自
至
年
復
活

月 月
日 日

大東亞戦争関係一件
印度問題

樹立関係
「スバズ、チマンドラ、ボリス」ノ印度仮政府

第

卷

記

録

至

年

月

日

大東亞戦争関係一件
印度問題
「スバズ、チマンドラ、ボリス」ノ印度仮政府樹立関係

A

7

6

9-272

REEL No. A-1204

照 合 表

(分類 A.7.0.0.9-29-2)

第 号

昭和 年 月 日

発信者

受信者

件名

才二次世界大戦中=於ケル

我对印度拒策経緯概要

原書は下記にあり

記

A 門 7 類 0 項 0 目 9-29 号

REEL No. A-1204

0178

アジア歴史資料センター

政務局長

第一課長

第五課長

大臣、次官、特別

極秘

(昭一八六一一 條二)

自由印度「臨時政府」承認ニ關スル法律上ノ意見

本件承認ニ當リテハ事實上ノ承認ノ形式ヲ採リ又承認ノ前提トシテ英領印度中我方ニ依リ解放セラレ居ル「アンダマン」諸島ヲ不取敢同政府ノ領土トセシムルコト可然ト認ム其理由左ノ通

(一) 國家ノ存在前ニ政府ノミヲ承認スルコトニ關シテハ據ルヘキ先例ナシ(帝國ハ大正七年「チエツコスロヴァツク」國民委員會ヲ承認シタルモ右ハ政府ノ承認ニハ非ス)蓋シ既ニ政府ノ承認ト言フ以上ハ理論上當然國家ノ存在ヲ前提トス而シテ國家ハ國家ノ主權ノ客體タル領土及人民ナクシテハ存立シ得ス從テ全然國家ノ根據ヲ有セサル政府ニ對シ承認ヲ與フルカ如キハ法理上

外務省

説明シ得ヘカラサル所ナリ

(二) 若シ帝國ニ於テ國家ノ根據ヲ有セサル政府ヲ承認スルトセハ今次戰爭ニ際シ現ニ英國等ニ亡命シ居リ單ニ象徴的ナル意義ヲ有スルニ過キサル諸亡命政權或ハ重慶ニ於ケル朝鮮獨立政府等ノ如キ存在ヲ理論上逆ニ根據付クルカ如キ結果トモナルヘシ

(三) 既ニ本件措置ハ主トシテ謀略宣傳上ノ效果ヲ狙フ政略的考慮ヨリ實施セントスルモノナル以上國家ノ根據ヲ有セサル如キ政府ヲ承認スルヨリモ更ニ一步ヲ進メテ現在唯一ノ自由印度地域タル「アンダマン」諸島ヲ不取敢其ノ領土トセシメテ變カナリトモ國家トシテ從テ又政府トシテノ體裁ヲ具ヘシムル様スルコト策ノ得タルモノナリトスヘシ

外務省

次

官

極秘

自前年「臨時政府」承認ニ關スル法律上ノ意見

(昭一八、六、一一 條五)

本件ニ關シテハ、前年國會ノ議決スル先例ナシ。而シテ承認ニ關シテハ、國際法上未ダ一定シタル理論存セズト認ムルヲ適當トスベキモ、事關ニ係リ本件ニ付テモ、法律論トシテ既ニ多大ノ努力を取扱ノ餘地アルコトヲ認メザルベカラズ。從ツテ、純然タル法律的問題トスルヨリモ、寧ロ政治的問題トシテ決定ナキモノト認ム。唯、其ノ承認ノ形式ニ付テハ、研究ヲ要スベク、殊ニ其ノ政治的・重要性ニ係リ國內手續トシテハ、國際法ニ關ルノ要アルベシ。承認ノ效果ニ付テハ、舊國トシテ新ニ之ヲ決定スルノ外ナシ。

外務省

(日本標準規格B5)

(昭一八、六、一一 條二)

國家ノ存在前ニ政府ノミヲ承認シタル先例
 國家ノ存在前ニ政府ノミヲ承認スルコトハ、國家ノ主權ノ客體タル領土及人民ナキ政府ヲ承認スルコトトナル次第ナルヲ以テ、違例ノコトニ屬シ據ルベキ先例殆ドナキモ、右ニ關シ何等參考ト爲シ得ベキ帝國ノ先例概ネ左ノ通。

(一) 「チエツコスロヴァック」國民委員會ニ對スル承認

(イ) 承認ノ時期 大正七年九月九日

(ロ) 承認ノ對象 「チエツコスロヴァック」國民委員會 (「コンセイユ・ナショナル」)

(ハ) 承認ノ形式 正式承認

(ニ) 承認ノ方法 在英帝國大使發在巴里「チエツコスロヴァック」國民委員會理事長宛書翰ヲ以テ承認ノ宣言ヲ通告ス。

(ホ) 承認ニ關スル國內手續 閣議決定ヲ經タリ。

外務省

(日本標準規格B5)

(二)「ラトヴィア」國民議會ニ對スル事實上ノ承認

(1)承認ノ時期 大正八年一月四日

(2)承認ノ對象 「ラトヴィア」國民議會（「ナショナル・カウ
ンシル」）

(3)承認ノ形式 事實上ノ獨立團體トシテノ假承認

(4)承認ノ方法 在英帝國大使發「ラトヴィア」國民議會在英代
表者宛書翰ヲ以テ通告ス。

(5)承認ニ關スル國內手續 記錄不備ニテ不明ナリ。

(6)「エストニア」國民議會ニ對スル事實上ノ承認

(1)承認ノ時期 大正八年三月十五日

(2)承認ノ對象 「エストニア」國民議會（「コンセイユ・ナシ
オナル」）

(3)承認ノ形式 事實上ノ獨立團體トシテノ假承認

外務省

(日本標準規格B5)

(二)承認ノ方法 在英帝國大使發「エストニア」臨時政府在英代
表者宛書翰ヲ以テ通告ス。

(3)承認ニ關スル國內手續 閣議決定ヲ經タリ。

(4)尙今次戰爭後發生セル亡命政權ノ事例モ又參考トナラズトセズ。

外務省

(日本標準規格B5)

外務省

昭和18 一五五八五 暗 盤谷 九月二十五日一四一五發 政

本省 二十五日二三五〇着

重光外務大臣

坪上大使

第一三九號 部外絶對極秘

(自由印度臨時政府承認方ノ件)

淺田參事官ヨリ

一、自由印度臨時政府樹立ニ關シテハ「ボース」ノ屢次聲明ニ依リ
可及的速ニ之カ實現ヲ要スル時機トナリ居レル處右ニ對スル承
認ノ問題ニ關シ東京方面ニ難色アリ其ノ理由トシテ承認ニ伴フ
國內手續ヲ回避シタシトノ意圖ナル旨傳ハリ居レルモ背後ニ複
雜ナル事情介在スルモノト想像セララル

極秘

電信寫

外務省

極秘

電信寫

三、「ボース」ハ臨時政府ニ對スル日本ノ態度不明瞭ナル時ハ自
御逆宣傳ニ利用サレ(四)印度内外印度人ノ猜疑心ヲ助長シテ獨立
運動ニ惡影響ヲ與フル惧アルコトヲ強調シ日本トシテ國內手續
上ヨリ種々困難ナル事情アルヘキモ大局的見地ヨリ明確ナル承
認ヲ與ヘラレ度キ旨要請シ居レリ
三、對印施策ハ單ナル軍事謀略ニ非スシテ戰略ニ併行シ雄大ナル構想
ノ下ニ政略ヲ推進スルノ要アルコトハ言ヲ俟タサル處ニシテ特
ニ本件ニ關シテハ印度ニ隣接セル緬甸、「タイ」其ノ他東亞各
獨立國ノミナラス歐洲同盟國ヲモ動員シ外交攻勢ヲトルコト必
要ニシテ之カ爲ニハ先ツ日本自身明確ナル承認ヲ與フルコト先
決問題ナリト思考セララルヲ以テ外務省トシテモ本件ニ關シ御
考慮相煩度

外務省

(丁)

第七政府聲明書



今般、スバス、ケランドラ、ボース氏ヲ主班 トスル 印交假政

府ノ成立ヲ見タル処、帝國政府、同假政府ノ成立ガ印
交人ノ多年ノ念願タル地、立印交、完成ノ為至大ノ
意義ヲ有ス。トキ、トク確信シ、右目的達成ノ為、努力
力ニ對シ、有ラズニ、協力ヲ為ス。トキ、トク茲ニ、聲明

明ス

36.30.00
12.20.56

外務省

車條總局漢文

印交人、印交 (或ハ建漢) 一七、三、三〇、一七、三、三〇

印交本通、一安、一統、立 一七、三、三〇

印交地、主ノ、一尺、的、カ、一、歩、一七、三、三〇

租、地、主、ノ、金、ヲ、金、ウ、ス 一七、三、三〇

新、地、主、ノ、印、交、ノ、建、設 一七、三、三〇

地、主、ノ、完、成 〃

地、主、ノ、自、由、ト、繁、榮、ノ、者、ラ、タ、ル、日 〃

外務省

印度假政府承認ニ關スル件

昭和十八年十月九日
大本營政府連絡會議決定

「S. C. ボース」ニ於テ印度假政府樹立ノ場合ハ印度施設殊ニ其ノ宣傳政勢強化ノ爲帝國ハ之カ承認ノ意志ヲ表明スルモノトス右ニ伴ヒ本假政府トノ間ニハ正式國際關係ヲ發生セシメサルコト勿論トス

備考 第三戰ノ本假政府承認ハ之ヲ妨ゲザルモノトス

以上

斯而同年十月二十一日昭南ニ於テ開催セラレタル印度獨立聯盟東亞代表者大會（「ボース」氏ハ同年七月同聯盟總裁及印度國民軍最高指揮官ニ就任セリ）ニ於テ「ボース」總裁ハ自由印度假政府樹立ヲ提案シ萬端一致ヲ以テ可決同日ヲ以テ假政府ハ成立シ「ボース」氏ハ同政府首席ニ推舉セラレタリ
尙同政府ハ其ノ戰闘的過渡的性質ニ鑑ミ機構ヲ簡潔ナルモノトシ

S 1.7.0.0 - 44

19

主席ノ下ニ軍事、外交、財政、宣傳、婦人ノ五部ヲ置キ（軍事部長及外交部長ハ主席兼任）外ニ無任所大臣及内閣顧問若干ヲ置ケリ
而シテ印度國民軍ハ假政府ニ屬シ「ボース」主席ノ統帥ノ下ニ置カレ從來ノ獨立聯盟ハ假政府ト表裏一体トナリテ國民運動ヲ推進スルコトトナレリ

茲ニ於テ帝國ハ既定方針ニ基キ同年十月二十三日同政府ヲ承認セリ本件承認ノ法的性質ニ就テハ純粹ノ國際法上ノ議論トシテハ未ダ自由印度國ノ成立ナキ以前ニ如何ナル政府ノ承認モアリ得ス當時ノ帝國政府聲明ニモアルカ如ク結局自由印度假政府ヲ自由印度假政府トル名稱ヲ有スル團體トシテ承認スルト云フ意味ヲ有スルニ過ギズト云フヘキナランモ又同承認ハ目下完成途上ニアル自由印度國ノ政府ノ承認トモ云ヒ得ベク換言セバ將來自由印度國成立ノ場合ハ右承認ハ國際法上正常ノ政府承認トナルヘキヲ以テ謂ハバ停

S 1.7.0.0 - 44

20

印度版印府奉詔ニ由スル事

昭和十八年十月九日

大蔵省印務局長官官印

「S. C. ホース」ニ於テ印製所ノ設置ハ印度版印府ニ其ノ官制以テ強化ノ爲常設ハ之カ本國ノ官制ヲ改訂スルモノトス百ニ付レ本國政府トノ間ニハ正式既成既成ニテ金至セシメサルコト勿論トス

印本 第三回ノ本版印府奉詔ハ之ヲ期ケサルモノトス

以上

片前四年十月二十一日附信ニ以テ印務セラレタル印版設立印製所
代表者大蔵省「ホース」氏ハ同年七月同編定印版及印版印製所
取高印製所ニ設けセリ」ニ以テ「ホース」印版ハ自由印版印製所
設立ラ爲メシ同場一設ラ以テ同版印製所ハ成立シ「ホ
ース」氏ハ同版印製所ニ設けセラレタリ
同版印製所ハ其ノ官制既成既成ニシテ印版印製所トシ

S 1.7.0.0 - 44

19

王后ノ下ニ在リ、外臣、其臣、其臣ノ五部ヲ領キ「ホース」
長及外臣領長ハ王后兼官」外ニ其臣兼官ハ内臣兼官若シテ其
リ
同シテ印度版印府ニ由リ「ホース」王后ノ親御ノトニ由
カレ其臣ノ兼官印版印府ト改定一體トナリテ其臣兼官ヲ兼
スルコトトナレリ

此ニ於テ印版印製所ハ改定方針ニ基キ同月二十三日同版印府ヲ承認セリ本
印版印府ノ官制既成ニ就テハ其臣兼官ノ改定上ノ既成トシテハ未ダ日
印版印府ノ成立ナキ以前ニ同版印府ノ承認モアリ其臣兼官時ノ
印版印府既成ニモアルカ如ク其臣兼官印版印府ヲ自由印版印
府トシテ其臣兼官印版印府トシテ承認スルコト云フ意味ヲ有スルニ由
キスト云フヘキナランモ又同版印府ハ目下完成途上ニアリ自由印版
印府ノ承認トモ云フベク其臣兼官ハ將來自由印版印府成立ノ場
合ハ其臣兼官ハ既成法上正當ノ印版印府トナルヘキヲ以テ其臣兼官ハ

S 1.7.0.0 - 44

20

止條件附ノ四府承認トシテ此限リニ於テ一種ノ四府承認ト云ビ得
ベシ、公的ニハ帝國政府ハ此見解ヲ採ルコトトセリ

第一、次歐洲大戰ノ際「チエツコスロヴァキヤ」國カ一應ノ領土
的基礎ヲ有スルニ至レルハ一九一八年十一月十四日ナルカ、此日
「オーストリア」ニ於テ國會議員召集サレ「チエツコ」國獨立ノ宣言
ヲナシ正式政府ヲ組織ス一之ニ先立ち同年十月巴里ニ於テ「チエ
ツコスロヴァキヤ」假政府樹立セラルルヤ、伊ヨリ承認ヲ受ケタ
ル例アリ

帝國ノ承認ニ引續キ「ビルマ」ハ十月二十三日獨逸ハ同二十八日
比律賓ハ同二十九日中華民國及滿洲國ハ十一月一日伊太利ハ同
二日泰國ハ同十七日「クロアチヤ」國ハ同十九日夫々自由印度假
政府ヲ承認セリ尙同假政府ノ依頼ニヨリ帝國政府ヨリ中立諸國ニ
對シテモ假政府成立ノ趣旨ヲ傳達セルモ中立諸國ハ右通告ニ對シ
何等措置ヲ採リタルモノナシ

假政府承認ノ問題研究サレ居リタル當時ヨリ一部ニハ承認ノ前提
トシテ、^{（イ）}同政府ノ領土トセシメ以テ同政府ノ承認ヲシテ
國際法上正常ノ承認ノ^{（イ）}アラシメントスル着想存シ居リタル所偶
々同年十月三十一日假政府承認ニ對スル謝辭表明ノ爲入京セル「
ボース」主席ガ十一月五日及六日ノ大東亞會議ニ「オブサーバト」
トシテ出席セル際帝國代表東條首相ヨリ印度獨立ノ第一階梯トシ
テ目下帝國ニ於テ占領中ノ印度領「アングマン」諸島及「ニコ
バル」諸島ヲ近ク自由印度假政府ニ歸屬セシムル用意アル旨「聲
明セラレタリ、帝國ニ於テハ右聲明ニ基キ本件諸島移管ノ方式等
研究中ナリシモ實現ニ至ラスシテ終戦トナリタルモノナリ
（イ）「ボース」氏ノ第二次來朝ハ十月五日及六日ノ大東亞會議ニ「オ
ブサーヴァト」トシテ參列セルガ政府及統帥部ノ主腦者トノ會見
ニ於テ「ボース」氏ノ持出シタル期望ハ「光機論」改造ト外交伸
縮ノ派遣ニ對印進攻作戰ノ急速實施ノ二點ニシテ前者ハ光機論

之ヲ「マニラ」ニシテ外交使節ヲ派遣セラントシテ請フニ在リシ
「オヤンネル」トシテ外交使節ヲ派遣セラントシテ請フニ在リシ
ガ結句終戦ニ至ル迄解決ヲ見ルニ至ラズ、後者ハ翌一九四四年
月以後「インパール」作戦トナリテ現ハレタリ
對印進取作戦ニ關シテハ「ボース」ハ第一次來朝ノ際ニ於テ既ニ
其ノ急速實施ノ必要ヲ力説シ、印度人ハ自力ノミヲ以テシテハ到
底英勢力ヲ印度ヨリ撃退シ得ザルコトヲ熟知シ居リ他万印度大衆
ハ新嘉ノ陥落「ビルマ」ノ敗戦ニ不尙向印度内ニ於ケル英軍ノ
不敗ヲ信シ居ルモ、若シ日軍ニシテ印度ニ侵入シ印度大衆ノ眼
前ニ於テ英軍ヲ撃破スルニ於テハ印度ノ反英運動、獨立運動ハ
大ナル刺激ヲ受ケ急速ニ熾烈化スベシ、而シテ日軍ニシテ期ヲ
失セズ印度ニ侵入スルニ於テハ印度人兵員ノ二五%ハ日本ニ加擔
スベシ等ノ語點ヲ述べタルカ、第二次來朝ノ際ハ東條首相及杉山
參謀總長ト會見シ、其ノ必要ヲ強調セルカ外務省ノ知所ニテハ

杉山參謀總長ヨリ準備成リ次第實施スベシ、尤モ準備完了ノ時期
ハ今ヨリ明言シ待ストイフ程度ノ回答ヲ得タルノミナリシ模様ト
一 一九四三年「インパール」作戦開始セラルルヤ「ボース」司令
ハ自ラ印度國民軍ノ主力(二ヶ師)ヲ率キ之ニ參加三月中旬日本
軍ト共ニ印緬國境ヲ越ユテ印度疆内進出セリ(同當時印度國民軍
ノ全兵力ハ三ヶ師ナリ各師ハ遊撃隊三乃至四、補給、衛生、補
給等ノ諸機關カ附屬シ整備ハ劣勢ナリ印度作戦開始當時「ビルマ」
ニ二ヶ師馬來ニ一ヶ師アリ)右作戦ニ際シテハ大本營發表ニ見ル
カ如ク帝國ハ「印度國民軍」ヲ支援シ、印度疆内ニ進入「セ
ル旨ヲ宣傳セリ、「ボース」主席モ四月四日ノ第二次聲明ニ於テ
印度國民軍ノ印度進入ヲ發表スルト共ニ自由印度假政府ハ印度國
民唯一ノ合法的政府ナルコト解放地區印度民衆ハ印度國民軍及假
政府任命ニ係ル行政官吏ニ對シ協力スベキコトヲ要請セリ

減額の特異な軍力
増進の態度等、向來
不十分の軍力兵器
不足の補給困難等
を以て、この交渉は
不十分の軍力兵器
不足の補給困難等
を以て、この交渉は

六 對印進攻作戦實施前ヨリ既ニ悪化ノ一路ニ在リシ光機關ト假政府
及印度國民軍トノ關係ハ右作戦ノ失敗ニ依リテ捨收シ得ザル狀況
ニ陥リ、毀滅ニ歸シタル印度國民軍ノ再建ノ問題・新事態ニ對處
スル爲ノ對印工作ノ再檢討ノ問題等重要ナル事項山積シ居ルニ不
拘何等現地ニ於テ解決シ得ザル實情ナリシヲ以テ「ボース」氏ハ
屢次來朝ノ希望ヲ表明セルモ陸軍就中現地陸軍機關ハ同氏ノ來朝
ヲ「ボース」之ヲ阻止シタルモ、東條内閣退陣シ小磯内閣成立スルニ
及ビ新内閣ト協議スル爲漸ク「ボース」氏ノ來朝ヲ見ルニ至リ一
九四四年十一月一日東京ニ到着セリ
第三次來朝ノ際「ボース」氏ト大本營ノ間ニ印度國民軍ノ取扱ニ
關シ覺書交換セラレタルガ其ノ内容ハ印度國民軍ノ帝國軍隊ニ對
スル協力ノ際ニ於ケル指揮系統手續國民軍ノ兵力勞務協力印度國
民軍ニ對スル兵器・器材・糧秣等ノ補給軍費貸與教育等ノ諸事項
ニ百レレモ右ノ内我方ノ援助ニ關スル諸項目ハ事實上實施不可能

假政府ニ對スル外交使節派遣ニ付テハ前述ノ如ク當初ヨリ「ボ
ース」ノ熱望セル所ニシテ假政府承認アル以上ハ外交使節ノ交換ナ
カラザルベカラズトノ持論ナリシガ此頃ニ至リテ光機關ト假政府
トノ摩擦愈々甚ク此儘ニテ推移センカ「ボース」ニ於テ主席ノ
地位ヲ抛棄スル危險サヘ存シタルヲ以テ重光外相ハ之ヲ深覺シ局
面打開ニ苦慮シ結局陸軍側ヲ説得シテ假政府ニ對シ特命全權公使
ヲ派遣スルコトナレリ
然レドモ假政府ノ指導ハ軍部ニ關スルコト多キ故ヲ以テ軍側ニ於
テハ引續キ假政府ノ指導接衝ニ當リ度キ意圖ナリシ爲同公使ノ使
命ハ純然タル儀禮的ノモノニ止マルコトナレリ、之即チ當時十
一月二十一日ノ最高戦争指導會議ニ於テ左記ノ如キ報告アリタル
所以ナリ

記

秘

昭和18 一五九〇九(暗) 閣頁 十月二十一日一三三五發
本省 二十二日、九〇〇着

主管 南政

大東亞省

青木大東亞大臣

第九三號 (極秘)

澤田大使

(印度假政府樹立ニ關スル件)

貴電合第二一五六號ニ關シ

二十日本使「バーモウ」總理ヲ往訪冒頭貴電ノ趣旨ヲ説明「ビルマ
政府モ帝國ノ措置ニ同調シ假政府トシテ承認スルコト然ルヘキ旨ヲ述
ヘタルニ同總理ハ早速所要ノ準備ヲ整ヘ假政府トシテ承認スル手續
ヲ執ルヘシ假政府ハ將來當地ニ移リ來ルワケナルカービルマ政府

電信寫

規格-B5 (東京 1209)

極秘

大東亞省

トシテハ之トノ關係ヲ如何ニスヘキヤト問ヒタルニ付本使ハ帝國
トシテモ印度假政府トノ間ニハ正式國際關係ヲ發生セシメサル方針
ナレハ「ビルマ」政府トシテモ同様ニ措置セラレ假政府トシテ事實
上ノ友好關係ヲ維持セラルルコト然ルヘシト述ヘタルニ同總理ハ之
ヲ首肯シタリ

外務大臣ニ轉報アリ度

電信寫

規格-B5 (東京 1209)

極秘

昭和18 一六〇六六 「暗」 閣員 十月二十五日一三〇五發
本省 二十六日〇八二七着
青木大東亞大臣 北澤代理大使

主管 總務 (南政)

大東亞省

第一一〇號

(印度假政府樹立ニ關スル件)

貴電合第二一五六號ニ關シ

緬甸政府ハ印度假政府ヲ承認スルニ決シ二十三日其ノ旨同假政府宛

「通告セリ

「タイ」、河内、西貢、「マニラ」ニ轉電セリ

電信寫

印度假政府

極秘

電信寫

昭和18 一七四八九 (暗) 伯林 十月二十七日〇〇三〇發
本省 二十七日二三〇〇着

貴外務大臣

大島大使

第一二九七號 (至急)

(印度假政府樹立方「ボーズ」ヨリ發傳ハ) 通譯方要請ノ件

貴電第八四四號ニ關シ

二十二日河原ヲシテ政務局長「ヘンケ」ニ對シ印度假政府成立及
我方ノ措置 (貴電第八三三號及第八三二號) ヲ通報スルト共ニ冒
頭書簡ノ次第ヲ申入レシメタル處「ヘ」ハ發傳ニ於テハ印度假政
府承認ノ意嚮ヲ有シ居ルモ未タ「ボーズ」ヨリ右成立ニ關スル正
式通報ニ接セスト述ヘタルニ付本件ハ新政府正式承認ノ場合トハ

極秘

電信寫

2

稍事情ヲ異ニスルヲ以テ有正式通牒發セラルルヤ否ヤ承知セサルカ
 本日ノ通報ヲ以テ印度假政府ノ依頼ニ依ルモノト認メ差支ヘナシ
 ト述ヘ置キタル處同局長ハ之ヲ諒承シ早速大本營「リ」外相ニ報
 告シ二十四日「リ」外相ヨリ更ニ「ヒ」總統ニ報告セル趣ナルモ
 未タ決定ヲ見サル模様ナリ獨側ニ於テハ恐ラク近ク印度假政府ヲ
 承認スルモノト認メラルルモ「ボース」カ獨側ノ庇護ヲ受ケタル
 經緯及當國內ニ印度國民軍ノ存在スル點ニモ鑑ミ同人ヨリ獨政府
 ニ對シ假政府成立ヲ通報スルコト儀禮上至當ナルヤニ思考セラル
 ルニ付右取計方御措置相成度シ（了）

外務省

極秘

電信寫

印交假

3/24

昭和18 一七六九三 (暗)

伯林 十月二十九日二三〇〇發
本省 十一月一日〇七二五着

政

重光外務大臣

大島大使

第一三一四號 (至急)

(印度假政府成立方「ボース」ヨリ獨側へ通報方
票話ノ件)

在電第一二九七號ニ關シ

二十九日政務局長「エルドマンズドルフ」公使ハ河原ニ對シ獨側
 ニ於テハ「ボース」ヨリノ正式通報ヲ俟チ居リタルモ右ハ未タ到
 着セサルニ付二十八日東京經由ニテ承認ノ電報ヲ發シタリ右ハ二
 十二日ノ日本側ヨリノ申入レヲ以テ「ボース」ノ依頼ニ據ルモノ

外務省

極秘

電信寫

2

ト看倣シ取計ヒタル次第ニテ日本トノ協調ヲ示ス爲特ニ考慮ヲ拂
 ヒタルモノニ付右御承知アリタシト述ヘタル趣ナリ
 尙其ノ際「エ」ハ本件ニ付テハ伊太利政府ニ對シ同様措置方通報
 濟ニシテ又「ナムビヤ」ノ件（貢電第八四七號）ハ目下「リ」外
 相ノ下ニテ審議ナナル旨述ヘタル趣ナリ

(了)

外務省

極秘

電信寫

印
交
照
南
打
電
機

昭和18 一六二九〇 「略」 マニラ 十月二十九日一六四三發
 本省 二十九日二二〇〇着

大東亞省

主管 總務 (南政)

村田大使

第四三號

(印度假政府樹立ノ件)

往電第三一號ニ關シ

本二十九日午前專經由獨立通電傳達方依頼ノ電報ニ接シタルニ付直
 ニ之ヲ傳達スルト共ニ假政府承認ノ電報ヲ昭南宛打電機シメタリ
 尙昭南ニハ「ボース」不在ナルニ鑑ミ右電報別電スルニ付東京ニ於
 テモ御傳達相成度シ

(了)

機密-B5 (東京, 120)

電信寫

秘

滿洲國公使ヨリ右聯絡越ス場合可然御措置相成度
南京へ轉電セリ
外務大臣へ轉報アリタシ

大東亞省

規格-B5 (東京 1209)

電信寫

秘

昭和18 六五四四七 略
青木大東亞大臣
第四三四號

主管 滿洲(總務)

新京 十一月二日〇九三〇發
本省 十一月二日〇九五〇着
梅津大使

大東亞省

(滿洲國ノ印度假政府承認ノ件)

(一) 滿洲國ニ於テハ本十一月一日關東軍ヲ通シテ印度假政府ヨリ十月
二十一日成立ノ旨通報ニ接シタルヲ以テ直ニ之ヲ承認スル旨ノ電
報ヲ同シク軍ヲ通シテ印度假政府へ發送セリ
(二) 偶々「ボーム」氏訪日中ナルヲ以テ外交部ヨリ駐日大使ニ對シ帝
國政府ト打合ノ上同氏へ右通報セシムル様訓令セルニ付テハ駐日

規格-B5 (東京 1209)

第 921 号

Monsieur le Ministre

I have the honour to inform Your Excellency that in accordance with the will of all freedom-loving Indians in India and abroad the Provisional Government of Azad Hind (Free India) was established on the 21st. October, 1943, with its Headquarters temporarily at Shonan or Singapore.

I avail myself of this opportunity to assure Your Excellency of my highest consideration.

Subhas Chandra Bose
Minister for Foreign Affairs,
Provisional Government of Azad Hind.

REEL No. A-1204

0196

アジア歴史資料センター

印
留
第
一
二
號

昭和18 一八〇〇一 略

ハチカン 十一月三日一三五〇發
本省 六日〇八一五着 政

重光外務大臣

原田公使

外務省

秘

電信寫

木内參事官ヨリ
二日外務省ヨリ「ムツソリーニ」ノ印度政府首席宛電報（別電）
傳達方依頼越セリ尙本件ハ獨側ニ通告済ノ由ナリ
獨ヘ傳電セリ

極秘

主管 總總（支線）

昭和18 一六五七五 「暗」 南京 十一月三日一八五〇發
本省 四日一四五〇着

大東亞省

青木大東亞大臣

谷 大使

第一九七三號

印度假政府樹立ニ關スル件

貴電第一八二四號ニ關シ

十月二十一日貴電ノ趣旨早速申入レ置キタル處國民政府ニ於テハ
一日褚部長ヨリ「ボース」印度假政府主席宛承認ノ電報ヲ二日汪
主席ニ慶祝電ヲ發出セラレタリ

關係書類空送ス
外務大臣ヘ轉報アリタシ

電信寫

編者-B5 (東京 1209)

外務省

昭和18 一八〇八八 略 馬尼羅 十一月七日一三二五發 政
本省 七日一七三五着

重光外務大臣

村田大使

第一七號

(自由印度假政府承認ニ關スル件)

貴電合第九一五號ニ謝シ

比律賓政府ハ十月二十九日附ヲ以テ直接「ボース」宛別電ノ通通
報セリ

(7)

秘

電信寫

外務省

昭和18 一八〇八九 平 馬尼刺 十一月七日一三二五發 政
本省 七日一七三〇着

重光外務大臣

村田大使

第一八號 (別電)

(自由印度假政府承認ニ關スル件)

Honorable Subhas Chandra Bose Head of the Provisional Government of Free
India Syonan.

The Philippine Government and people have learned with profound gratification
the establishment of the Provisional Government of Free India under your
leadership in the firm belief that the freedom of India is essential to
a new world order based on justice. The Philippine Government is pleased to
recognize your Government and sincerely hopes to see established a new

電信寫

電信寫

free and independent India, as befitting the pace that has made ours of the

Greatest contributions to human civilization.

Jose P. Laurel

President of the Philippines

(Over)

外務省

REEL No. A-1204

0199

アジア歴史資料センター

賞

自由印の綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 十二月五日 右の通稱之成す自由印の綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 此の綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 通稱之綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 事件ハ平素 ~~綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也~~ ^{大カシ} ~~綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也~~
 果之綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 トシテ陸海軍等之綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 キ ~~綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也~~ ^{コト} ~~綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也~~

外務省

賞

十一月九日 改正 掃部 事務下
 通告之綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 一、支那関係云々ノ綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 二、綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 三、綴り成すヤカニ之の通稱方之固たる也
 ト意見ヲ回答ス

外務省

通報案

自由印交假政府宣言ニ依リ明カニセシムル通 余日ハ一九四五年

十月二十一日ヲ以テ東亞印交独立聯盟ノ指令ニ依リ自由印交

假政府樹立セラレタル旨閣下ニ通報スルノ先業ヲ有シ候同

假政府ハ右聯盟ノ組織セル印交聯軍ノ援助ヲ得ル地

立印交定案ノ為ノ開争ヲ行ハントスルモニ有上候

余ハ此種報案閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

外務省

(派来ノ経路等)

自由印度假政府ノ性格ニ鑑ミ本件通報ハ拒軸側諸國ニ対シテ

ノミ之ヲ為スコト可然ト認ム(主ナル拒軸國ハ既ニ承認済ナルヲ以テ

通報ハ不要ナリ)

尚前大戦ニ於ケル「チエッコスロウ」ク「國民協會等」所謂「交戦政府」ニ

関スル先例ヲ檢スルニ何レノ場合ニ於テモ聯合諸國以外ニ対シテハ何等ノ

通報ヲナサザリシモノノ如シ。

外務省

Ministre le Ministre,

1 J'ai l'honneur de porter à la connaissance de Votre

Excellence que le Gouvernement Provisoire de l'Inde

Inde a été établi le 21 octobre 1943, conformément aux

instructions de l'Association de l'Indépendance de l'Inde

en Asie Orientale, ^{comme l'a noté précédemment} et que ~~ce~~ est énoncé dans la Déclaration

du Gouvernement Provisoire de l'Inde

En raison de cette occasion, je tiens à vous

~~faire savoir~~ que le nouveau Gouvernement, à l'aide de l'Armée

外務省

Nationale de l'Inde, organisée par ladite Association, ~~est~~

est ~~provenant~~ venue à l'indépendance

La dernière bataille pour acquiescer l'indépendance

de l'Inde, émise ~~et~~ ardemment par le peuple de l'Inde

depuis ^{de} longtemps.

Je vous prie, Monsieur le Ministre, de croire

de ma très haute considération.

外務省

Monsieur le Ministre,

J'ai l'honneur de porter à la connaissance de
Votre Excellence que le Gouvernement Provisoire des
Libres ^{Indes} a été établi le 21 octobre 1943, conformément
aux instructions de l'Association de l'Indépendance
des Indes en Asie Orientale, ~~comme le mouvement proclamé~~
la Déclaration du Gouvernement Provisoire des ~~Libres~~
Indes, *Libres.*

En saisissant cette occasion, je tiens à Vous *faire savoir*
~~dire~~ informer que le nouveau Gouvernement, à l'aide de
l'Armée Nationale des Indes, organisée par ladite
Association, ~~est formellement résolue~~ *est formellement résolue* *bataille pour* *acquies*
~~livrer le dernier combat dans le but~~
~~d'accomplir~~ l'indépendance des Indes, désirée ~~et~~
ardemment par le peuple des Indes depuis ^{si} longtemps.

Veillez agréer, Monsieur le Ministre, les
assurances de ma très haute considération.

秘

主管 南政

大東亞省

昭和18 六六〇二三「陸」 蘭貢 十一月九日一五〇〇發

本省 十一月二十一日一〇〇着

青木大東亞大臣

北澤代理大使

第一四〇號

印 度 假 政 府 承 認 手 続

（「ビルマ」ノ印度假政府承認ニ關スル件）

往電第一一〇號ニ關シ

「ビルマ」政府ニ於テハ假政府ヨリ政府成立ノ旨通告アルヲ待ツテ之ヲ承認スル手續ナリシモ十月二十三日帝國政府ノ承認アリキ後於テモ通告接到セザリシニ依リ當館ト協議ノ上二十三日假政府主席宛電報ヲ以テ承認ノ手續ヲ取リタル次第ナリ

電信寫

規格-B5 (東東 1207)

秘

大東亞省

其ノ後十月末ニ至リ昭南總軍ヨリ當地軍ニ對シ假政府主席「ボリス」ヨリノ依頼ニ依ル趣ヲ以テ十月二十一日假政府樹立セラレタル旨「ビルマ」政府ニ傳達アリタキ旨電報アリタルニ依リ軍トモ協議ノ上十一月二日附公文ヲ以テ本旨ヨリ「ビルマ」國外務大臣ニ右ノ次第傳達シ置キタリ

電信寫

規格-B5 (東東 1209)

大臣了
極秘
次書
政務局長

「アンダマン」及「ニコバル」兩諸島ヲ自由印度假政府ニ歸屬セシムルニ付採ルベキ方式ニ關スル件

昭一八、一一、一一、條二

十一月六日東條首相ヨリ大東亞會議ニ於テ「目下帝國軍ニ於テ占領中ノ印度領タル「アンダマン」諸島及「ニコバル」諸島ヲ近ク自由印度假政府ニ歸屬セシムル用意アル旨」闡明セラレタル處右ニ關シテハ左ノ方式ニ依ルコト可然ト認ム。

(一) 差當リ兩諸島ノ軍政ハ撤廢セザルノ建前ヲ採ルコト

(二) 現地軍司令官ト自由印度假政府主班トノ間ノ了解トシテ一ノ覺書ヲ作成スルコト

(三) 右覺書ニ於テ假政府主班ハ軍司令官ノ認許ヲ以テ兩諸島ニ於ケル民政(一般行政)ヲ執行スルモノナル旨ヲ定メ其ノ權限ニ關スル規定(軍司令官ノ認可ヲ經ベキ事項ヲ列擧スルノ形式ニ依ルヲ可トスベシ)ヲ設クルコト

外務省

(日本標準規格B5)

第三課長
再四條二

(四) 右覺書作成ニ付テハ國內法制上ノ手續ヲ經ルヲ要セザルベキコト
↑其ノ理由左ノ通。

(1) 自由印度假政府ノ特殊性ニ鑑ミ兩諸島ニ於ケル帝國ノ軍政ヲ即時撤廢シ之ヲ同假政府ニ最終的ニ歸屬セシムルノ方式ヲ採ルコトハ差當リ不可能ナルト共ニ他面例ヘバ「ビルマ」獨立前ニ於ケル「バーモ」ノ場合ニ於ケルガ如ク其ノ占領地行政ニ對スル協力ヲ認メツツモ法律上ハ全ク軍ニ從屬スルモノトシテ取扱フコトハ既ニ帝國ニ於テ假政府ノ成立ヲ認メ居ル以上妥當ニ非ザルベシ。即チ本件ノ場合ニ於テハ右兩者ノ中間ノ方式ヲ選バザルベカラザルベキ次第ナリ

外務省

(日本標準規格B5)

(四)帝國軍ノ占領地行政ハ國際法ニ準據シテ行ハルモノナル處陸戰條規第四十三條ニハ「國ノ權力ガ事實上占領者ノ手ニ移リタル上ハ占領者ハ絶對的ノ支障ナキ限占領地ノ現行法律ヲ尊重シテ成ルベク公共ノ秩序及生活ヲ回復スル爲施シ得ベキ一切ノ手段ヲ盡スベシ」トアリ又占領地ノ行政及司法ノ機關ハ特ニ支障ナキ限り從來ノ當該住民機關ヲ以テ之ニ充ツルコトハ一般のナル慣行トナリ居レリ、「ジャワ」ニ於ケル候地行政、「セレベス」及南「ボルネオ」等ニ於ケル酋長（「サルタン」「ラジャ」）ノ活用等ハ右慣行ノ踏襲ナリ。

自由印度假政府ハ從來ヨリ殘存ノ機關ニハ非ザルモ印度民衆ノ自發的意思ニ依リ設立セラレタルモノナルニ付印度領タル「ニコバル」諸島及「アングマン」諸島ノ民政ヲ右假政府ニ擔當セシムルハ其ノ實質ニ於テ一種ノ住民機關ノ活用ト異ル所ナシト稱スルコトヲ得ベシ。

(日本標準規格B5)

外務省

特ニ右ノ如キ覺書ヲ作成スルノ方式ニ依ルコトトシタルハ同假政府ノ有スル特殊ナル格式地位ニ鑑ミタルモノナルガ右ハ現地軍司令官ノ責任ニ於テ之ヲ行フコトトシテ何等差支ナキモノト認メラル。

(ハ)然レ共右覺書ハ其ノ性質上何等法律上ノ効果ヲ有スルモノニ非ザルヲ以テ有効期間等ニ關スル規定ハ之ヲ設ケザルコトトスベク又其ノ作成ニ付テハ國內法制上ノ手續ヲ經ルヲ要セザルベシ。

(日本標準規格B5)

外務省

参考

批

(参考) 我國ノ占領地行政ニ關スル先例ニ於テ身分上軍ニ屬セザル者ガ占領地ニ關スル政務ノ一部ヲ管掌シタル事例トシテ本件ニ關シ何等參考トナルヘキモノ左ノ通。

(一) 大正七年「シベリヤ」出兵ニ際シ浦潮派遣軍司令部ニ政務部特設セラレタルガ同部ノ權限等ハ別段法令ヲ以テ定メラルルコトナク左ノ如キ陸軍大臣及外務大臣間ノ覺書ヲ以テ規定セラレ同部ハ軍司令官ニ隸屬シ外務大臣ノ指示ヲ受ケテ涉外政務ヲ管掌スルコトトセラレタリ

覺書 (大正七年八月十二日)

- 一 外務大臣ハ涉外政務ニ關シ直接ニ政務部長ニ指示スルコト
- 二 政務部長ハ前項指示ノ事項執行ニ付軍司令官ノ承認ヲ受クヘキコト
- 三 軍司令官軍事上ノ必要アルトキハ政務部長ニ右指示事項執行ノ延期又ハ停止ヲ命スルコトヲ得ルコト

(日本標準規格B5)

外務省

四 前項ノ場合ニハ軍司令官ハ參謀總長ヲ經テ其ノ旨ヲ外務大臣ニ通牒スルコト

五 政務部長ハ涉外政務ノ執行ニ關シ軍司令官ノ承認ヲ經テ隨時外務大臣ニ報告ヲ爲シ又ハ指示ヲ請フヘキコト

(日本標準規格B5)

外務省

(二) 大正九年尼港事件ニ因ル薩哈噠州占領ニ際シ派遣軍司令部ニ外交官ヲ置クコトトシ其ノ職權等ヲ規定スルニ當リテハ左ノ如ク概ネ前記(一)ノ例ニ據リタリ。

覺書 (大正九年五月二十二日)

- 一 外務大臣ハ涉外政務ニ關シ直接ニ司令部附外交官ニ指示スルコト
- 二 司令部附外交官ハ前項指示ノ事項執行ニ付豫メ司令官ノ承認ヲ受クヘキコト
- 三 司令官ハ軍事上ノ必要アルトキハ司令部附外交官ニ右指示事項執行ノ延期又ハ停止ヲ命スルコトヲ得ルコト
- 四 前項ノ場合ニハ司令官ハ直ニ理由ヲ付シ陸軍大臣ヲ經テ其ノ旨ヲ外務大臣ニ通牒スルコト
- 五 派遣地方帝國居留民救援ニ關スル事項ニ付テハ司令官ハ豫メ留意ナク司令部附外交官ノ意見ヲ徵シ之ヲ實行スルコト

外務省

(日本標準規格B5)

右覺書ハ大正九年十二月ニ至リ左ノ通修正セラレタリ

薩哈噠州派遣軍司令部附外交官ノ權限ニ關スル覺書

- 一 司令部附外交官ハ軍司令官ノ命ヲ承ケ占領地ニ關スル涉外事項ヲ掌ルモノトス
- 二 外國若ハ外國人(占領地域内ニ居住スル露國人ヲ除ク)又ハ外國トノ條約ニ關係アル事項(軍政部管掌事項ヲ除ク)ハ總テ涉外事項ニ屬スルモノトス
- 三 軍政部管掌事項ト雖モ重要ナルモノニ付テハ軍司令官ハ隔意ナク司令部附外交官ノ意見ヲ徵スルコトヲ要スルモノトス
- 四 外務大臣ハ涉外事項ニ關シ直接ニ司令部附外交官ニ指示スルヲ得ルモノトス
- 五 司令部附外交官ハ前項指示事項ノ執行ニ付テハ豫メ軍司令官ノ承認ヲ受クルヲ要シ且ノ外部ニ發表スヘキモノハ軍司令官ノ名ヲ以テスルモノトス

外務省

(日本標準規格B5)

六 軍司令官若シ軍事上ノ必要ニ依リ第四項指示事項執行ノ延期又
ハ停止ヲ命シタルトキハ直ニ理由ヲ附シ陸軍大臣ヲ經テ具ノ旨
ヲ外務大臣ニ通牒スルモノトス

外
務
省

(日本標準規格B6)

REEL No. A-1204

0209

アジア歴史資料センター

自由印度假政府承認ニ關スル件

昭和18 六六一二六 暗 盤谷 十一月十二日一八〇〇發 政
本省 二十日二〇〇五着

重光外務大臣

坪上大使

第一六五號

(自由印度假政府承認ニ關スル件)

賁電合第九一五號ニ關シ

「ボース」ヨリ直接通電ナキヲ以テ閣下へ事情問合等致シ居ル中
時日ノ經過シタル次第ナルカ本件ハ南方軍ヲ通シテ通報スルコト
トナリ假政府ヨリ直接電報セサルコトニ中央決定アリタル趣青木
大臣發電報合第二二六八號及陸軍武官ノ連絡ニ依リ承知シタルニ
依リ本使ヨリ「タイ」側ニ通報シ置ケルカ此ノ種通報ハ先例モ無

極 祕

電信寫

外務省

極 祕

電信寫

2

キコトニモアリ「タイ」側ニ於テハ不取敢別電第一六六號ノ通り
(八日受付)祝意ヲ表シタリ正式承認ニ就テハ尙審議中ノ由
但シ承認ヲ與フルコトニハ萬異義ナキコトハ確言シ居レリ
大東亞大臣へ轉報アリ度シ(轉報濟)

一般

電信寫

昭和18 一八五三七 平
アンカラ 十一月十三日一五四二發
本省 十五日〇一〇〇〇着

外務省

重光外務大臣

栗原大使

第四一六號

(自由印度假政府成立通告ノ件)

貫電合第九二〇號ニ關シ

十三日附「ノート」ヲ以テ本件通告文土外務省ニ傳達シ置ケリ

(了)

一般

電信寫

昭和18 一八五三五 平
ブカレスト 十一月十三日一四〇〇發
本省 十四日一四〇〇〇着

外務省

重光外務大臣

筒井公使

第脱號

(自由印度假政府成立通告ノ件)

貫電合第九二〇號ニ關シ

十三日申入レタリ(了)

電信寫

秘

印

昭和18 一八六九三 略
 本 省 十一月十六日一〇二〇 政
 十七日〇八三三 着

兵光外務大臣
 山路公使

第三五一號

(自由印度假政府成立通告ノ件)

貴電合第九二〇號ニ關シ

十三日「シンマノフ」外務大臣ヲ往訪本使ヨリ印度假政府通告文
 ラ傳達シ置キタリ(了)

外務省

電信寫

秘

印

昭和18 一八五五七 略
 本 省 カブール 十一月十四日一八三〇 發
 十五日一四四七 着

東光外務大臣
 七田公使

第四五二號

(自由印度假政府成立通告ノ件)

貴電合第九二〇號ニ關シ

十四日日本使外務大臣ヲ往訪傳達セル處大臣ハ何レ閣議ニ報告スヘ
 キモ只今ノ處何トモ申上得サル旨答ヘタリ(了)

外務省

秘

昭和18 一八七六二 暗 ヴァチカン 十一月十七日一六〇〇發
本 省 十八日〇九一五着

重光外務大臣

原田公使

第三四一號

(「ム」ノ印度臨時政府承認並ニ祝電ニ關スル件)

木内參事官ヨリ

「ムツソリ」ノ印度臨時政府ニ對スル承認並ニ祝電ハ發ニ往
電第三一二號ヲ以テ轉達方御依頼セル通ナル處右ハ「ボ」ノ
獨立(實電第九二一號)ヲ待タス「ム」カ獨働ノ慈惠ニ依リ自發
的ニ爲セルモノノ如クナルニ付印度側ニ御問合ノ上「ボ」ノ謝電
未發送ナルニ於テハ當地經由ニテ至急發出方御斡旋ヲ請フ(了)

電信寫

極秘

秘

主管 南政

大東亞省

昭和18 六六五二二 寄 盛谷 十一月十九日一八三〇發
本省 十九日二〇〇五着

爾木大東亞大臣

坪上大使

又(大東亞 各大臣宛)第九五號
外務

(自由印度假政府承認ニ關スル件)

往電五第八六號ニ關シ

「タイ」國政府ハ自由印度假政府ヲ承認スル旨十七日附公文(空送)
ヲ以テ申送シタルニ付當地軍ヨリ總軍ヲ通シ假政府補ハ通告セシメ
タリ
尚十八日午後「ラジオ」發表アリタリ
御見込ニ依リ補係公館へ電アリ度

電信寫

規格-B5 (東東 1209)

秘

電信寫

昭和18 一九〇一 略
ストックホルム 十一月十九日一八五五發
本 省 二十二日二二一〇着

重光外務大臣

岡本公使

第七七〇號

(自由印度假政府成立通告ノ件)

日電合第九二〇號ニ關シ

瑞典政府ニ對シテハ十一日附公文ヲ以テ梅達濟丁林政府ニ對シテハ取調ヘタル結果政府ハ「フアンクシヨン」シ居ラサルモ外務省ハ存續シ居リ外交圖ト交渉スル權限ヲモ認メラレ居リ且事務ハ事務總長ニ依リ處理セラレ居ルコトヲ確メタルニ依リ事務總長「ニルス、スベニングセン」宛十一日附公文ニテ本十九日發送濟右爲念報告ス

外務省

電信寫

秘

昭和18 一九四四 略
グアチカシ 十二月一日一七一五發
本 省 二日一二〇〇着

重光外務大臣

原田公使

第三六二號

(自由印度假政府成立通告ノ件)

貴電合第九二〇號ニ關シ
本件「マリオオーネ」國務卿ニ傳達シ置キタル處「マ」ヨリ二十八日附書翰ヲ以テ「ボース」ニ對シ右報告ノ好意ニ對スル謝意ヲ傳方帝國政府ヲ通シ然ル可ク措置アリ度キ旨依頼越セリ(了)

外務省

印
度
兵

極
秘

電信寫

昭和18 一九七三九 (暗) 伯林 十二月七日 一四三〇號 政
本省 八日〇七一〇着

重光外務大臣 大島大使

第一四三八號

(在獨印度兵ノ旅券ニ關スル件)

當由ニ於ケル「ボース」ノ後繼者タル「ナンビア」ヨリ當國ニ於ケル印度兵ニシテ自由印度政府ニ歸順ヲ申出スル者ニ對シ自分ノ裁量ニ依リ確實ト認ムル場合ニハ右自由印度政府ノ旅券又ハ國籍證明書ヲ發給シ度ニ付新政府ヨリ自分ニ對シ右旅券又ハ國籍證明書發給ノ權限ヲ與ヘラルル様斡旋方願出タル處右ハ同人カ獨逸政府ニ派遣セラレタル自由印度政府代表者ノ地位ヲ要求シ居ルモノ

外務省

極
秘

電信寫

ニ非ス唯當國ニ於ケル印度兵カ悉ク英國旅券ヲ有シ居レルヲ以テ右ニ依リ轉向者ト然ラサル者トノ區別ヲ明カナラシムルト共ニ轉向者ニ對スル「ナ」ノ把握ヲ確實ナラシメントスル便宜上ノ措置ニ備キス獨側ニ於テモ此ノ點充分諒解シ居レルニ付右ニ御含ミノ上新政府ニ御交渉相成リ結果回電アリ度シ(了)

外務省

電信寫

昭和19 二七三八 略
 ダフリン 二月二十三日二三五二發
 本省 二十五日一五〇〇着
 調 政

重光外務大臣
 第一六號（伯林、「ベルン」經由）
 （愛蘭政府ノ印度假政府承認問題）
 一、昨十六日當國下院ニ於テ無所屬ノ一青年議員「フラアガン」ハ
 首相兼外相「デ、バレラ」ニ對シ在蘭員ノ自由印度假政府ノ存
 在ヲ承知シ居ルヤ又右政權ニ對シ承認ヲ與フル意圖アリヤ否ヤ
 ヲ質疑セル處「デ」外務大臣ハ右假政府存在ノ事實ハ承知シ居
 ルモ戰爭中ハ各中立國ノ慣例ニ從ヒ如何ナル新國家又ハ新政府
 ニ對シテモ承認ハ與ヘサル旨答辯セリ「フ」議員ハ更ニ過去ニ

電信寫

秘

昭和18 一九九二〇乙 略
 ダフリン 十二月十日一五四八發
 本省 十一日一四三〇着

重光外務大臣
 第二三七號（瑞西經由）
 （自由印度假政府成立通告文傳達ノ件）
 「ボース」自由印度假政府首班ヨリノ同政府成立通告文ハ御訓令
 ニ基キ本官ヨリ當國首相兼外相「デバレラ」宛十一月十七日附正
 式公文（通告文全文「ナキスト」添附）ヲ以テ之ヲ傳達シ置キタ
 ル處之ニ對シ外務次官ヨリ同月二十四日附公文ヲ以テ外務大臣ノ命
 ニ依リ右通告文ヲ傳達セル本官ノ公文ヲ「アクナレジ」スト申越
 セリ

於テ當國ノ假政府ヲ列國ノ承認獲得ニ努力セル事實ニ鑑ミ何故
 右印度假政府ヲ承認セサルヤト追及セルニ對シ「デ」外相ハ第
 一ノ質問ニ對スル右答辯ニ於テ當國政府ノ行動ノ根據ヲ明示セ
 リト述ヘタリ石質疑英文原文別電ス

三箇「フ」議員ノ所謂當國假政府トハ一九一九年一月愛蘭獨立ヲ
 宣言シ「ダブリン」ニ於テ結成セラレタル愛蘭共和國假政府ヲ
 指スモノナル人シ石假政府ハ「ベルサイユ」會議ニ代表ヲ派ス
 ル外（現當國大蔵大臣 S. F. O'Kelly 首席代表）米國其ノ他ノ列
 國ニモ代表ヲ派シ國際承認獲得ニ努力セリ（當時英國ノ牢獄ニ
 アリタル「デバレラ」スラ右「ベルサイユ」會議代表ノ一員ニ
 推サレタリ）一方當國現在ノ憲法第一條ニ依レハ當國政府ノ管

轄ハ全愛蘭ニ及フヘキモ實際上北部六州カ英國統治下ニアル爲
 實權ハ南部二十六州ニ限ラルトノ規定アリ以テ全愛蘭ヲ代表ス
 ル律師ヲ維持シ居リ「アンダマン」及「ニコバル」諸島ヨリ全
 印度ヲ代表スル律師ヲ執ル印度假政府ノ立場ト類似スル點アリ
 「ボース」氏ノ印度假政府ノ主張ハ當國人ニ「アビール」スル
 點多シ

三、印度假政府樹立、比島共和國及緬甸國獨立等ニ關スル記事ハ「ル
 ーター」通信欄占下ノ當國新聞ニハ殆ト報道セラレサルモ本邦
 側及獨逸側「ラジオ」放送等ニ依リ當國識者ノ注意ヲ惹キ同情
 的關心昂マリツツアリ

四、以上印度假政府側ニ然ルヘク御傳達アリタシ（了）

電信寫

極秘

電信課長工藤

外務省

大臣

次官

顧問 政務 通商 條約 調査 人典 儀典 文書 會計 會報 秘書 弘報

寫送先

昭和19 五六二三一 晴 蘭頁 四月十四日一四〇〇 本官 十四日一六五〇 着

重光外務大臣 澤田大使

第二九號(緊急、暗長符號)

(印度假政府解消自由印度正式政府樹立ニ關スル件)

任電第二七號ニ關シ

當地車ヨリモ車中央ニ對シ旨頭任電ト同趣旨ノ電報ヲ發シ又車ノ意見ヲ「ボース」ニ傳ヘタル結果「ボ」モ該機軸ク假政府ヲ解消シ組織ヲ改ムルノ外正式政府トスルコトヲ希望スル旨ノ電報現地車ヨリ車中央ニ發セラレタル趣ナルカ自由印度正式政府樹立及之ニ對スル我方ノ承認ニ關シ差富リ富方氣付ノ點爲念左ノ通り電報ス

外務省

極秘

電信寫

ニ

ルコト適當ト認ム

一、前記正式政府樹立ニ關スル「ボ」ノ意見ヲ傳達セル車電報ニ依レハ「ボ」ハ假政府ヲ解消シ正式政府タルコトヲ希望スルモ外交關係ノ樹立乃至條約締結等ヲ考慮シ居ラストノコトナルカ昨上大使託送本使私信報ノ通り「ボ」ノ本心ハ正式政府樹立ノ際ハ外交機關ノ設置ヲ希望シ居ルコト疑無キ次第ニテ右外交關係ノ樹立ヲ考慮シ居ラストノ「ボ」ノ意見ハ尤機關ノ求メノ結果ニ依ルモノト認メラルル)ニ付正式政府トシテ承認ノ際ハ成可ク速ニ外交機關ヲ設置スルコト適當ナルハク而シテ右外交機關ハ該機ノ關係上車官一體トシテ尤機關ノ長ヲシテ外交機關ノ長ヲ兼ネシメ其ノ間ニ適任ナル外務系人物ヲ配シ之ヲ輔佐セシムルコト適當ト認ム

極秘

電信寫

6

ニ前記ノ如キ條約締結ヲ考慮シ居ラストノコトナルカ正式政府ノ領土ニ對スル日本軍ノ進駐ヲ合法化シ其ノ他日印双方ノ行政關係ヲ鞏固ナラシムル)爲ニハ何等カノ形式ニ於ケル兩政府間ノ合意ヲ必要トスルニ非ラサヤト思考セラレ

三、假政府獨立ノ際同政府ハ印度全土ヲ總意ニ依リ正式印度政府獨立ノ際ハ之ニ引續クヘキコトヲ聲明シ居リ又印度國內民衆ノ獨立ニ對スル熱意ヲ示シシメ「ボース」政府ニ對スル支援ヲ強化セシムル見地ヨリスルモ假政府ヲ解消シ正式政府トスルモ印度解放ノ機ニハ政府ノ内部ヲ改組シ印度全土ヲ總意ニ依リテ決定セラルヘキ人物ヲ以テ政府ヲ構成セシムヘキコトヲ明カニシ現在ノ政府關係者ノ謙虛ナル氣持ヲ表明セシムルコト適當

外務省

極秘

電信寫

4

ト認めラル

四、正式政府ノ所在地ニ付テハ我方ニ於テ「インパール」地方ヲ長期ニ亘リ確保シ得ルコト明カトナル迄ハ同地方ニ進出セシメサルヲ明トスヘシ

(了)

外務省

別送
別送

政務局長

第一課長

第二課長

第五課長

秘

條約局長

第二課長

第 四 二 號

自由印度政府承認問題ニ關スル法律上ノ意見

昭和一九四一七、條二

自由印度假政府ヲ解消シ新ニ自由印度政府ヲ組織セシメ之ニ對シ承認ヲ與フルコトニ付テノ法律上ノ意見左ノ通。

(一) 元來總テ政府ハ國家ノ政府タルベキモノナルヲ以テ未ダ國家存セザルニ政府ノミガ存在スト云フガ如キコトハアリ得ズ。而シテ右ニ付テハ政府ガ正當政府乃至法律上ノ政府ナリヤ又ハ假政府乃至事實上ノ政府ナリヤハ問フ所ニ非ズ。蓋シ假政府乃至事實上ノ政府トハ既ニ政府トシテノ實質ヲ有スルモ當該國內法上確固タル基礎ヲ有セザルモノヲ意味シ國家ノ存在ヲ前提トスルコトニ於テハ正當政府乃至法律上ノ政府ト何等異ル所ナケレバナリ。而シテ既ニ國家ナクシテハ如何ナル意味ニ於テモ政府ナルモノハ在リ得ザル以上國家ナクシテ政府ノ承認ト云フコトモ如何ナル意味ニ於テモ在リ得ザル次第ナリ。

外務省

(日本標準規格B5)

(二) 從テ新ニ自由印度政府ヲ組織セシメ之ニ承認ヲ與フルトスルモ其ノ際「自由印度國」ナル新國家ヲ獨立セシムルニ非ザレバ石ハ少クトモ法律上ノ效果ハ生ゼス。即チ「自由印度政府ノ承認」ヲ法律上意味アルモノトセムガ爲ニハ更ニ進ンテ自由印度國ノ獨立ヲ承認セザルヲ得ザル次第ナリ。

(イ) 自由印度國ヲ獨立セシムル場合ニ於テハ新國家ハ當然其ノ政府ノミナラズ何等カノ領土及人民ヲ有セザルベカラズ、而シテ帝國政府ニ於テ其ノ獨立ヲ承認スルナラバ之ト正式ノ國交ヲ開始スルコト當然ナルベク單ニ其ノ領土ニ對スル日本軍ノ進駐ヲ合法化スル爲ノミニテモ之ト條約關係ヲ設定スルコトヲ要ス。

(ロ) 自由印度國ヲ獨立セシメズシテ「自由印度政府ノ承認」ヲ行フ場合ハ法律上ニ於テハ「自由印度假政府」ナル團體ノ名稱ガ「自由印度政府」ト變更セラレ帝國政府ニ於テ其ノ事實ヲ承認スルコトヲ意味スルニ過ギズ。即チ帝國政府ト同團體トノ關係ニハ何等ノ變更ナキモノトス。

外務省

(日本標準規格B5)

右ニ拘ラス尙政治ノ進出ニ依リ自由印度國ヲ獨立セシムルコト
 ナクシテ自由印度政府ヲ組織セシムル之ニ承認ヲ與フル必要アルニ
 於テハ擬ノ自由印度政府ノ承認ノ場合ニ於ケルガ如ク「自由印
 度政府ヲ自由印度政府トシテ承認ス」トノ方式ヲ採ル外ナキモノ
 ト思テス。即チ自由印度政府承認ノ帝國政府聲明ニ「之ヲ自由印
 度政府トシテ承認」ストアルハ少ク其法律上ハ單ニ「自由印度
 政府」ナル名稱ヲ有スル一ノ國体ヲ承認スルコトヲ意味スルニ
 過キズシテ之ヲ國際法上ノ「假政府トシテ承認スル」ノ意味ヲ有セザ
 ルモノト解スベキモノナル處自由印度政府ノ承認ノ場合ニ於テモ
 法律上ハ右ト同様ノ解釋ヲ採ル外ナカルベキヲ以テナリ。右ノ場
 合何レニセヨ自由印度政府ハ如何ナル意味ニ於テモ國際法上ノ「政
 府」ニ非ズ、從テ又其ノ承認モ法律上政府ノ承認トシテノ意味ヲ
 有セザルモノナルヲ以テ之ヲ「政府トシテ」取ヒハ「正式政府ト
 シテ」承認スト言フガ如キハ用語安當ヲ缺クモノト云ハサルベカ

外務省

(日本標準規格B5)

ラズ(尤モ「自由印度政府ヲ自由印度政府トシテ承認ス」トノ方
 式ニ依ル場合ニ於テモ元來何等政府トシテノ實質ヲ有セサルモノ
 ガ「假政府」ト稱スルコト自体既ニ法律的ニハ變態ナル政治的使
 用指圖ナルカ故ニ實質ニ變態ヲ加ヘズシテ更ニ之ヲ「政府」ト稱
 セシムルハ依然トシテ法律的ニハ變態ナルヲ免レズ)。

外務省

(日本標準規格B5)

何向國家ノ存在前ニ政府ノミヲ承認スルコトニ付テ採ルベキ先例ナ
キハ蓋シ當然ノコトナルベシ。前大戦ニ際シ帝國ハ「チエツカ、
スロヴァキア」國民委員會、「ラトヴィア」國民議會、「エスト
ニア」國民議會等ニ對シ夫々承認ヲ與ヘタルカ之等ノ國體ハ何レ
モ法律上又ハ事實上ノ政府タルノ性質ヲ有シタルモノニ非ズ（國
體ノ名稱ニモ政府又ハ假政府ノ又字ヲ使用シ居ラス）、從テ又管
區カ之等ノ國體ニ與ヘタル承認モ政府ノ承認ニハ非ズ。即チ「チ
エツカ、スロヴァキア」國民委員會ノ承認ニ當リテハ帝國政府ハ
「チエツカ、スロヴァキア」軍ヲ以テ勸誘ニ對スル正規ノ戰動
ニ從事スル協定交戦軍ト看做シ「チエツカ、スロヴァキア」國民
委員會ガ該軍ヲ組織スルノ權限ヲ有スルコトヲ承認シタルニ止
マリ又「ラトヴィア」國民議會及「エストニア」國民議會ニ對シ
テハ夫々「事實上ノ獨立國體トシテノ假承認」ヲ與ヘタルニ過ギ
ズ（註）。

外務省

(日本標準規格B5)

(註) 客年十月二十三日帝國政府ガ自由印度假政府ニ與ヘタル承
認ハ法律上ノ政府トシテノ承認ニ非ザルノミナラス事實上ノ
政府トシテノ承認ニモ非ズ。何トナレバ「自由印度」ナルモ
ノハ國家ニ非ズ。從テ「自由印度假政府」ナルモノハ本來ノ
意味ニ於ケル假政府ニハ非ザルヲ以テナリ。右承認ノ意思ヲ
表明シタル帝國政府聲明ニハ「今般」スバズ。チャンドラ。
ボース」ヲ主班トスル自由印度假政府ノ成立ヲ見タル時帝國
政府ハ石ガ印度人多年ノ念願タル獨立印度完成ヘノ一大躍進
ナルコトヲ確信シ之ヲ自由印度假政府トシテ承認シ其ノ目的
達成ノ努力ニ對シ有ユル協力支援ヲ爲スベキコトヲ茲ニ聲明
ス「トアル處自由印度假政府ヲ「自由印度假政府トシテ承認
ストハ即チ單ニ「自由印度假政府」ナル名稱ヲ有スル一ノ國
體ヲ承認スルノ意味ヲ有スルニ過ギズト曉スベキモノナリ。

外務省

(日本標準規格B5)

極秘

印度自由政府承認ニ関スル特許申請要旨(記憶より)

ボリスノ軍がインパールに入リタル場合ハ現在ノ自由印度仮政府

ヲ解消シ正式ニ自由印度政府トナリタルコトヲ聲明スルニ付独

伊モ我方ト全調ヒテ之ヲ承認アリ度

自由印度政府ノ設立ハ軍電ニテ東京ニ通報、帝國政府其旨ヲ

伊ニ通報スヘシ

三國委員會ニ於テ承認ノ聲明ヲ行ヒタ

予メ在京大使、右ニ南ニル权限ヲ與ヘ置カレヤウ手配アリ

外務省

参考

大臣
新内閣
次官
立

第二課長
第五課長
別
付

極秘

再回條二

自由印度假政府トノ關係調整方ニ關スル法律上ノ
 條約局第二課
 昭和十八年十月二十一日昭南ニ於テ自由印度假政府ノ成立ガ宣
 言セラレ、自由印度假政府ハ印度國民軍ノ援助ヲ得テ自由獲得
 ノ最後ノ闘争ヲ行フモノナルコトガ闡明セラレタリ。而シテ「
 スパス・チャンドラ・ボース」ハ自由印度假政府主席及印度國
 民軍最高司令官ニ就任シタリ。
 右ニ對シ帝國政府ハ同月二十三日「スパス・チャンドラ・ボ
 ス」氏ヲ首班トスル自由印度假政府ヲ承認シ其ノ獨立印度完成
 ノ爲ノ努力ニ對シ有ラユル協力支援ヲ爲スベキコトヲ聲明シ、

(日本標準規格B5)

外務省

帝國ノ同盟關係モ亦之ニ關シテ夫々承認ヲ與ヘタル處右ハ國際
 法上ノ所謂「政府ノ承認」トハ稱シ難キモ帝國政府ガ右聲明ニ
 依リ少クトモ自由印度假政府ナルモノヲ一箇ノ獨立ノ國体トシ
 テ承認スルモノナルコトハ疑無ク餘地ナキトコトナリ。
 (一) 自由印度假政府ハ「ボース」ヲ最高司令官トスル獨立ノ軍隊ナルガ
 自由印度假政府ト一体トナリテ獨立印度完成ノ爲闘争シツツア
 リ、本年五月帝國軍ノ降参國境突破ニ關シテ大本營發報(五月二
 十三日)ハ我軍ハ印度國民軍ハ實獲ハ三月中旬國境ヲ突破シ印
 度國內ニ進入セルコトヲ明カセリ。右ハ前記帝國政府聲明ニ
 照應シ自由印度假政府ノ獨立性ヲ認メ居ルモノト謂フベシ。
 尙自由印度假政府首班「ボース」ハ四月四日ノ(第二次)聲明
 ニ於テ自由印度假政府ハ自由印度假政府ノ指揮ノ下ニ國境ヲ突破シ
 印度領内ニ進入セル旨ヲ述ベタリ。
 以上ニ依リ帝國トシテハ少クトモ自由印度假政府及其ノ指揮下ニ

(日本標準規格B5)

外務省

19

特派員トスモ
可ナリ

(二) 措置

在ル印度國民軍ニ對シ獨立ノ地位ヲ認メ居ルコト明瞭ナリ。

從來帝國トシテハ自由印度假政府及印度國民軍ニ對シ實際上種々ノ協力支援ヲ爲シ來リタル次第ナル處既ニ自由印度假政府及其ノ指揮下ニ在ル印度國民軍ニ對シ獨立ノ地位ヲ認メ居ル以上ハ此等トノ連絡ノ機關乃至方法モ右承認ニ相應スルモノナラサルベカラズ。

(一) 一般事項ノ連絡

帝國政府トノ間ニ正式國際關係存セズ又存セシムベキニモ非サルヲ以テ(昭和十八年十月九日大本營政府連絡會議決定参照)正式ノ外交使節ヲ交換スルガ如キハ其ノ筋ニ非ズト雖モ帝國政府ハ政府自体トシテ自由印度假政府ニ對シ協力支援ヲ爲スベキ旨ヲ聲明シタル次第ナルニ付作戰關係事項ハ別トシ一般ニ右ノ協力支援ヲ爲スニ當リテハ帝國政府ノ機關ヲシテ之ガ處理ニ當

外務省

(日本標準規格B5)

(一) 作戰關係事項ノ連絡

ラシムベキコト當然ナリ。而シテ差當リ一般事項ニ關シテハ「ビルマ」國駐劄帝國特命全權大使ヲシテ帝國政府ト自由印度假政府トノ間ノ連絡ニ當ラシムルヲ適當トスベシ。(註一)
作戰關係事項ノ連絡ハ我方ノ現地最高指揮官ト印度國民最高司令官トシテ「ボース」トノ間ニ行ハルベク主要事項ハ兩者間ノ作戰協定ニ依リ定メラルベキモノト思考ス。(註二)

(註一)

前大戰ニ際シ帝國政府ハ大正八年五月英、米、佛、伊ニ對シ「オムスク」政府ノ假承認ヲ提議シタルガ此等聯合國ハ之ニ同意セザリシ爲メ帝國政府モ承認ヲ爲スコトハ差控ヘタルモ同年八月加藤恒忠ヲ特命全權大使ニ任命シ之ヲ「オムスク」ニ派遣シテ西比利亞ニ於ケル軍事以外ノ一般政務ヲ管掌セシメタルコトアリ。

外務省

(日本標準規格B5)

又今次戦争ニ際シ米英蘇ハ伊意利政府（「ボノミ」政権）ト
ノ外交關係設定（十月二十五日發表）前ヨリ夫々政府代表（
米國及英國ノ代表ハ何レモ大使ノ資格ヲ有シタリ）ヲ羅馬ニ
駐在セシメ居リタリ（之ヨリ先昭和十八年九月「ペドリオ」
政権ハ米英蘇トノ休戦後間モナク獨逸ニ對シ宣戰シ右ニ付米
英蘇ハ共同聲明ヲ以テ「ペドリオ」政権ニ對シ共同交戦者ト
シテノ地位ヲ認メ協力ヲ爲スベキ旨ヲ明カニシタル次第アリ
（註二）
英國ハ「ド・ゴール」政権トノ間ニ英國總理大臣「チャーチ
ル」ト「ド・モール」將軍トノ間ノ往復書翰（一九四〇年八
月七日「ロンドン」ニ於テ署名）ノ形式ニ依リ「フランヌ」
國陸軍軍ノ編成、費用及服務條件ニ關シ了解ヲ達セタリ（條
約集第七〇五號參照）。

外務省

(日本標準時B5)

(又、昭南)

十九、十一、二十

湯川生

○ヒルマ□ニ帝□特命全権公使ヲ派遣シ帝□政府ト自由印度假政府ト内、
諸般ノ連絡ニ當ラシム（第一草案）

○「外交關係ヲ設定ス」ノ意味ヲ單ニ外交官ヲ派遣シ連絡ニ當ラシムノ
意味トナルヤウニ解釋ス（第二草案）

○公使館ハ設置直セス（秘密院ノ南條アリ）
Mission japonaise / 名稱通カナム

○大正六年六月十三日勅令第六十四号「特命全権大使又ハ特命全権公使臨時

設置」
特ニ重要ナル任務ヲ處理スル爲 外交官ヲ外□ニ派遣スルノ必要アルトキハ
其ノ任務ノ終了ニ至ル迄ノ間臨時特命全権大使又ハ特命全権公使ヲ
置クコトヲ得
(以下要旨)

最高戦争指導會議

報告第七號

印度假政府指導ニ關スル件

昭和十九年一月三十一日
最高戦争指導會議議報

- 一 帝國政府ハ外交代表ヲ印度假政府ニ派遣ス
- ニ 印度施策ニ關シテハ從來浦大本營之ニ任シ關係各機關之ニ協力ス
- 三 第一項ノ外交代表ハ印度施策ニ關シ大本營印度施策機關ノ長ノ區處ヲ受クルモノトス

以上

本件特派公使ハ右ノ如キ性質ナリシ爲假政府側ヨリ交換的ニ外交使節ノ派遣ヲ受クルコトニナリ居ラズ我方トシテハ正式ノ外交關係ノ設置ニハ非ル立前ヲ採リ居リタル次第ニシテ從テ本件公使ニ任セラレタル蜂谷公使ハ陛下ノ御信任狀ヲ携行セザリシモノナルガ地方「ボース」主席ハ我方ノ公使特派ヲ以テ正式ノ外交關係開

B 1.7.0.0 - 44

27

本件特派公使ハ右ノ如キ性質ナリシ爲假政府側ヨリ交換的ニ外交使節ノ派遣ヲ受クルコトニナリ居ラズ我方トシテハ正式ノ外交關係ノ設置ニハ非ル立前ヲ採リ居リタル次第ニシテ從テ本件公使ニ任セラレタル蜂谷公使ハ陛下ノ御信任狀ヲ携行セザリシモノナルガ地方「ボース」主席ハ我方ノ公使特派ヲ以テ正式ノ外交關係開

設ノ如ク解シ居リタル爲御信任狀無キ公使ヲ接受シ得ズト主張シテ讓ラザリシ爲帝國政府ニ於テハ御信任狀ニハ非ル國書ヲ準備シテ之カ提示方決定シ居リタルモ右ニ至ラズンテ終戦ヲ見タリ又光復關ノ改造ニ付テモ第二次來朝ノ際大本營ト「ボース」氏間ニ一應話合聽リタルモ實施遲延ノ屢次「ボース」氏ヨリ督促ヲ受ケタルガ終戦時ニ至ルモ尙解決ヲ見ルニ至ラザリキ

「ボース」氏ハ其ノ親蘇的意見ヲ常ニ公然ト表明シ居リ屢次獨ノ對蘇開戦ヲ難ズルガ如キ言葉ヲ洩シ居リタルガ第三次來朝ノ際重光外務大臣ニ對シ自由印度假政府ノ對蘇接近ニ付意嚮ヲ破キシモ同外相ハ之ニ反對セル經緯アリ「ボース」氏ハ結局自己ノ發意ニ於テ在京蘇聯大使ニ對シ兩度ニ亘リ書翰ヲ送り而會ノ希望ヲ傳達セントセルモ第二回目ニ於テハ書翰ノ受理スルヲ拒否セラレタリ

其後戰局ノ惡化ト共ニ「ボース」氏ハ日蘇諒解促進ヲ仲介者の

B 1.7.0.0 - 44

28

勞ヲ執ラントノ着想ヲ持スルニ至リ東郷外相ニ辭リ來レルニ付外
相ハ上海邊リニテ「タス」通信代表者ニ「アプローチ」スルモ可
ナラントノ意圖ナリシモ「ボース」氏ノ支那總行不可能ナリシモ以
テ沙汰止トナレリ

ハ終戦ニ際シ日本政府ニ於テハ「ボース」氏ニ於テ其ノ意圖アラバ
日本ニ來ルベキ旨申傳ヘタル處主席ハ右示唆ヲ容レ上京ノ途ニ上
レルガ途中臺灣ニ於テ飛行機事故（墜陸後五十米餘ニシテ「プロ
ペラー」飛ビ去リ墜落火傷病院ニ於テ死去）ノ爲、逝去スルニ至レリ
尙同主席ノ負傷ヨリ死ニ至ル迄ノ態度ハ勇敢剛強其ノモノニシテ
人ヲシテ痛ク感激センメタリ

以
上

B 1.7.0.0 - 44

29

REEL No. A-1204

0228

アジア歴史資料センター

Nippon Times

November 27, 1944.

**Move to Strengthen
Free India-Japan Ties
Is Lauded by Netaji**

"I am very happy that it has been decided to establish diplomatic relations between the Imperial Japanese Government and the Provisional Government of Azad Hind, and that the Imperial Japanese Government is going to send a diplomatic representative to my Government," said Subhas Chandra Bose, Head of the Provisional Government of Free India, in a statement he issued on Sunday on hearing of the Japanese Government's new decision. "This will facilitate and strengthen our mutual cooperation. At a time when we are standing on the threshold of the third and decisive phase of the present war, it is necessary to tighten the bonds between Japan and our other allies, on the one side, and the Provisional Government of Azad Hind, on the other. I feel that the establishment of diplomatic relations between the Imperial Japanese Government and the Provisional Government of Azad Hind will enable us to intensify our war-effort and, thereby, to play a more active and substantial role in the common struggle for the defeat and overthrow of the Anglo-American Powers and the liberation of my country."

REEL No. A-1204

0229

アジア歴史資料センター

Nippon Times

November 27, 1944

JAPAN TO ACCREDIT DIPLOMATIC EXPERT TO AZAD HIND GOVT

Board of Information Issues Statement on Move to Bolster Cooperative Ties

The decision to dispatch a diplomatic representative of the Imperial Japanese Government to the Provisional Government of Azad Hind was announced by the Board of Information in the following statement issued at 1 p.m. on Sunday:

"While conferences have been going on between Subhas Chandra Bose, Head of the Provisional Government of Azad Hind, who is now visiting in Japan, and leaders of the Imperial Japanese Government concerning measures for furthering cooperative relations between the two Governments for the successful prosecution of the War of Greater East Asia as well as the attainment of Indian independence, it has been decided that the Imperial Japanese Government, as a practical measure for realizing the aforesaid purpose, will dispatch a diplomatic representative to the Provisional Government of Azad Hind."

Agreement Is Reached

Since his arrival here on November 1, Subhas Chandra Bose, Head of the Provisional Government of Azad Hind, had been conferring with the leaders of the Japanese Government concerning measures for furthering cooperative relations between the Japanese and Indian Governments, and as a result, an agreement was reached to dispatch a diplomatic representative to the Provisional Government of Azad Hind. And regarding this measure, the Board of Information, on Sunday, issued a statement given above.

The present measure is intended to make closer the political ties between the Japanese and Indian Governments through a Japanese diplomatic representative, and it is expected that by this step both the Japanese and Indian Governments will redouble their joint efforts toward the prosecution of the War of Greater East Asia as well as toward the attainment of Indian independence.

The Provisional Government of Azad Hind was organized on October 21, 1943, and the Imperial Japanese Government immediately extended recognition on October 23 of the same year. On November 6, on the occasion of the Assembly of Greater East Asiatic Nations, former Prime Minister General Hideki Tojo expressed his ardent desire for attainment of Indian independence by declaring the return of the Andaman and Nicobar Islands to the Provisional Government. Later, in spring of this year, the Indian National Army under the command of Mr. Bose commenced its historic advance toward their motherland by conducting cooperative operations with the Imperial Japanese Forces on the Indo-Burmese border. Meanwhile, 3,000,000 Indian nationals resident in Greater East Asia got together and formed a powerful organization.

Thus, the Provisional Government of Azad Hind has been considerably strengthened militarily, economically and politically. That the Imperial Japanese Government has decided to dispatch a diplomatic representative to the Provisional Government is a powerful manifestation of Japan's ardent desire for political cooperation with the Azad Hind Government by going a step farther than the hitherto existing military and economic collaboration.

The Imperial Government will shortly choose a suitable person to be dispatched to the Provisional Government. It is expected that this will serve to promote immeasurably the cooperative relations between the two Governments in the future, thereby contributing greatly to the successful termination of the War of Greater East Asia as well as realization of the long-cherished Indian independence.

日本国政府
印度政府
協同関係

REEL No. A-1204



予算閣議
説明書

自由印度假政府ニ對スル外交使節派遣方ニ關スル件

十一月一日來朝セル自由印度假政府「ホース」主班ハ同二十九日
離京歸還ノ途ニ着ケルカ兵衛岡主班ハ自由印度假政府ト日本側ト
ノ協力關係増進方ニ關シ關係各大臣竝ニ軍首腦部ト懸談シ種々
ノ意見及希望ヲ開陳セルカ特ニ帝國政府ノ間ニ外交關係設立方ヲ
熱望スル所アリタリ。

即チ自由印度假政府ハ各年十月二十一日其成立ヲ見帝國政府ハ同
二十三日之ヲ承認セルカ爾來同政府ハ順調ナル發達ヲ遂ケ本春ノ
印緬國境作戰ニハ同政府所屬ノ印度國民軍之ニ參戰シ相當ノ成績
ヲ挙げタルモ其後作戰上ノ必要ニ基キ同軍ノ後退ヲ見ルニ至リ自
由印度假政府ハ印度人饑餓上將又對外宣傳上不利ナル地位ニ立ツ
コトトナレリ。依テ「ホース」主班ハ此際自由印度假政府ト日本
政府トノ間ニ直接ノ關係ヲ設置シ帝國ノ外交代表ヲ迎フルコトヲ
得ハ單ニ同政府ト日本政府トノ關係ニ貢獻スルノミナラス印度及

外務省

(日本標準規格B5)

世界ニ對スル東亞政策重博ニモ奇異スル所大ナルヘキ旨力説セリ

然ルニ自由印度假政府ト日本側トノ間ニハ軍學關係ノ事項多キ關
係上印度政策ニ關シ指導ニ當リ居ルハ大本營ナルヲ以テ本件ニ付
テハ大本營印度政策機關ト密接ナル連絡ヲ保持スルヲ要スルニ付
大本營側トモ充分連絡ノ上慎重考慮ノ結果今後帝國ト自由印度假
政府トノ特殊の關係ニ即應シ且我軍學上ノ要請ニ反セサルカ如キ
方法ニ依リ帝國政府ヨリ石假政府ニ對シ外交代表ヲ派遣スルコト
ニ決定シ以テ「ホース」主班ノ熱望ニ副ハントスル帝國側ノ誠意
ヲ示スト共ニ同假政府トノ協力關係ヲ一層緊密化シ併セテ對外宣
傳上ノ効果ヲ擧ケムコトヲ期セル次第ナリ。

右外交代表ニハ在緬大使ヲ兼任セシムル案モアリタルカ左記ノ諸
理由ニ依リ兼任案ヲ排シ特派公使ヲ派遣シ之ニ必要最少限度ノ隨
員ヲ附スルコトニ決定セル次第ナリ。

外務省

(日本標準規格B5)

- (一) 本措置ニヨリ自由印度假政府ノ國際的地位ヲ高メ對印其他對外宣傳上ノ效果ヲ擧クルニハ在滿大使ノ兼任テハ如何ニモ申譯的ニテ充分ナル成果ヲ期待シ得サルコト
- (二) 假政府備ニ於テハ同政府ニ對スル獨立ノ外交機關設立方ヲ熱望シ居リ兼任ニテハ到底元方ヲ満足セシメ得サルコト
- (三) 戰局ノ推移ニ依リテハ假政府所在地ヲ移轉スル必要アリ而モ其實現性遠カラストノ視測強キヲ以テ事前ニ斯ル舉動ニ即應スル措置ヲトルヲ遺憾トセルコト

外務省

日本標準規格B5

閣議說明資料

昭和十九年十二月一日

自由印度假政府ニ對スル外交代表派遣方ニ關スル件

十一月一日來朝セル自由印度假政府「ボース」主席ハ同二十九日
 東京野澤ノ途ニ着ケルガ、其間同主席ハ自由印度假政府及印度國
 軍ト日本側トノ協方關係増進方策ニ關シ關係各大臣及軍首腦
 部ト懇談ヲ遂ケ相互間ノ意思疎通ニ資シタル外數回ニ亙リ講演ヲ
 行ヒ且對米、對印、對獨、對內各方面向放送ヲナシ大ニ我宣傳上
 ニ貢獻スル處アリタリ

「ボース」主席ガ今次來朝中開陳セル意見及希望ノ大部分ハ軍事
 ニ關スルモノニシテ石ハ軍部トノ關係ヲ遂ケラレタルモノト
 信スル處同主席ハ帝國政府トノ關係ニ於テハ特ニ外交關係設定方
 ヲ熱望スル所アリタリ

自由印度假政府ハ客年十月二十五日其成立ヲ見、帝國政府ハ
 承認セルガ爾來同政府ハ順調ナル發達ヲ遂ゲ本春ノ印緬

外務省

日本標準規格B5

國協作戦ニハ同政府内閣ノ印度國民軍之ニ参戦ヲ相當ノ成績ヲ舉
 ゲタル趣ナルガ其後作戦上ノ必要ニ基キ同軍ノ撤退ヲ見ルニ至リ
 自由印度假政府ハ印度後乘上將又對外宣傳上不利ナル地位ニ立ツ
 コトトナレルヲ以テ「ボース」主席ハ右ノ軍事的守勢ヲ補フニ政
 治的攻勢ヲ以テセントシ之ガ一策トシテ帝國トノ外交關係設定
 ヲ固持セル次第ナリ
 然ルニ自由印度假政府ト日本側トノ間ニハ軍事關係ノ事項多ク
 テ我方ニ及テ同政府ノ指導ニ當リ居ルハ大本營ナルヲ以テ實際的
 見地ヨリスレハ大本營印度總策機關ノ外ニ獨立セル外交代表ヲ派
 遣スルハ必ズシモ適當ナラスト思料セラレタルニ付大本營側トモ
 充分連絡ノ上慎重考慮ノ結果今般帝國ト自由印度假政府トノ特殊
 的關係ニ即應シ且我軍海上ノ要請ニ反メザルガ如キ方策ニ依リ暫
 時政府ヨリ右假政府ニ對シ外交代表ヲ派遣スルコトトシ以テ「ボ
 ース」主席ノ熱望ニ副ハントスル帝國側ノ誠意ヲ示スト共ニ同假

(日本標準規格B5)

外務省

政府トノ協力關係ヲ一層緊密化シ併セテ對外宣傳上ノ效果ヲモ舉
 ゲムコトヲ期セル次第ナリ
 又右外交代表ハ帝國側ヨリ一方的ニ之ヲ派遣スルモノニシテ閣下ノ
 應印度側ヨリノ代表者派遣ヲ豫想シアラス且自由印度假政府ノ性
 格ニモ鑑ミ右ハ正當ノ外交關係樹立ヲ意味スルモノニ非ザルコト
 勿論ナリ
 内閣「ボース」主席ノ懸望モアリ同主席滯京中ニ在リ決定シ對外宣
 傳上ニ之ヲ利用セシガ爲本件公表ヲ急ギ通日情報局發表ヲ行ヒタ
 ル次第御諒承アリタシ
 (備考) 閣議ノ後又ハ前ニ大藏大臣ニ對シ何レ豫算ヲ事務的ニ折
 衝スヘキ旨念ヲ押シ置クコト

(日本標準規格B5)

外務省

急務

條約第三課長

大

次

自由印度假政府ニ對シ與ヘタル承認ニ関シ外部ヘ

應酬振ニ関スル件

十九、十二、八

擬問

曩ニボースラ班トスル自由印度假政府ノ成立ニ際シ帝不

擬答

政府ハ客年十月二十三日之ヲ自由印度假政府トシテ承認

第五課長

スル旨聲明シタルガ右承認ノ性質如何

擬答

帝不政府ノ右聲明ハ不際法上ノ所謂政府ノ承認ノ性質

十九、十二、二十
改訂増補

ヲ有スルモノナリ

擬問

不際法上ノ政府ノ承認ト謂フハ當該政府カ不際法上ノ主

体タル一ノ不家ヲ代表スル資格ヲ有スルモノナルコトヲ一ニ式ニ

外務省

認ムルコトナルベキガ自由印度假政府ハ如何ナル不家ヲ代表

スルモノナリヤ

擬答

自由印度假政府ニ依リ代表セラルベキ不家ハ目下完成ノ途

上ニ在ル独立印度ナリ

擬問

独立印度ハ未ダ領土ヲ有セザル處領土ヲ有セストモ之ニ不

家ノ觀念ヲ予ヘ得ベキヤ

擬答

独立印度ハ未ダ領土ヲ有セ不家ト完全ナル不家トハ認め

得タルモ完成ノ途上ニ在ルモノナルコトハ事實ニシテ近キ將來

ニ於テ領土ヲ獲得スベク且少ナクトモ客年十一月六日

外務省

大東亞會議ニ於ケル東條内閣總理大臣ノ聲明ニ於テ帝玉
ハ印度獨立ノ第一階梯トシテ目下帝玉軍ニ於テ占領中
ノ印度領タル「アングマン」諸島及「ニコバル」諸島ヲ近ク自由印
度假政府ニ帰屬セシムル用意アル旨明ラカニセラレタル次第モ
アルニ付遠カラズ或ル範圍ノ領土保有ヲ期待シ得ベク就
時ノ特例トシテ自己ノ領土ヲ追ハレタル所謂亡命政権
ガ猶一般ニ其ノ存在ヲ容認セラレ居ル現下ノ実情ヲ照合
シテ不完全トシテ一應ヲ妥トシテ觀念シテ然ルベシ

外務省

ナラハ之ニ對シ直チニ正式ノ常駐使節ヲ交換スルコトトシテハ
如何

擬答 政府トシテ承認スルコトノ結果直チニ正式ノ常駐使節ヲ交
換セザルベカラズトノ理由ナシ、獨立印度ノ發達ノ模様ヲ見テ
ル上正式ノ常駐使節ヲ交換スルコトト致シ度

擬問 獨立印度完成ノ際更メテ他家ノ承認ヲ要スルヤ、將又現
在トヘタル政府トシテノ承認ガ必要ノ承認ヲ包含シモノナリ
ヤ

擬答 獨立印度ハ一應觀念トシテ存スルモ其ノ具體的範圍等
他面

外務省

英領 英領印度へ未だ領土ヲ有セサル地帯領土ヲ有セストキ之ニ關係
 ノ規定ヲ與ヘ付ヘキヤ
 英領 英領印度ハ未だ領土ヲ有セサル地帯領土ヲ有セストキ之ニ關係
 實ニシテ北緯約米ニ於テ領土ヲ獲得スヘク且少クトキ各年十一
 月六日入東亞會議ニ於ケル東亞内閣會議ニ由リ聲明ニ於テ帝國ハ
 印度獨立ノ第一階梯トシテ日下帝國軍ニ於テ占領中ノ印度領土ハ
 「アングラマン」陸海及「ニコバル」諸島ヲ北緯約米ニ由リ領土
 領土ヲシムル用意アル旨聲明シカニセラレタル次第ナリルニ付
 フス取ル範圍ノ領土休有ヲ期待シ付ヘク取附ノ特例トシテ自己ノ
 領土ヲ過ハレタル範圍ニ於テ領土ヲ一取ニ其ノ存在ヲ容認セラレ
 居ル境下ノ實情ヲ照合シ不完全ナラ一照國家トシテ觀念シテ然ル
 ヘシ
 英領 自由印度領政府ノ承認力政府ノ承認ノ性質ヲ有スルモノナラ
 ハ之ニ對シ直)テ正式ノ常駐使節ヲ交換スルコトトシテハ如何

外務省

英領 政府トシテ承認スルコトノ結果直チニ正式ノ常駐使節ヲ交換
 セサルヘカラストノ理由ヲシ、獨立印度ノ前途ノ模倣ヲ見タル上
 正式ノ常駐使節ヲ交換スルコトト致シ候
 英領 獨立印度完成ノ際其メテ國家ノ承認ヲ安スルヤ、將入境在與
 ヘタル政府トシテノ承認力國家ノ承認ヲ安ムモノナリヤ
 英領 獨立印度ハ一照觀念トシテ存スルニ能ハルモノ具體的範圍ハ
 明確ナラサル次第アルヲ以テ獨立印度完成ノ際ニ其メテ之ニ關係
 トシテノ承認ヲ與フルヤ否ハ其ノ際ノ情勢ニ依リ決定スヘキト
 ノト志利ス

外務省

府ノ成立ヲ通報シ來リタル處右ニ對シテハ帝國政府ハ何等ノ權
 宜ヲ採ラザリシカ、同年十二月在東京同國人「ネメック」大尉
 ヨリ帝國外務省ニ「チェッコ・スロヴァキア」國民評議會副
 會長ノ署名アル委任狀ヲ提示シ同會ノ本邦駐在代表トシテ承認
 セラレ度キ旨申入レアリ帝國外務省ハ右申入ヲ *proclamo actos* ス、
 ル旨回答セルニ止マレルモ翌大正八年（一九一九年）二月右代
 表者ヨリ同人カ帝國駐在「チェッコ・スロヴァキア」國臨時代
 埋公使ニ任命セラレタル趣ヲ以テ後日同政府ヨリ正式ノ任命ア
 ル迄差當リ右ノ資格ヲ承認セラレ度旨申出アリ之ニ對シ帝國政
 府ハ審議ノ結果右資格ノ承認ヲ決定シ四月二十五日ノ官報ニ之
 ヲ掲載セリ。其ノ后帝國ハ主タル同盟及聯合國ノ一國トシテ對
 奧平和條約及主タル同盟國及聯合國ト「チェッコ・スロヴァキ
 ア」國トノ條約ニ天々調印シ「チェッコ・スロヴァキア」國ノ
 獨立ヲ正式ニ承認シタリ。

外務省

戊

自由印度政府承認ニ關スル公報
 ○領事局公報（十月二十三日上午十一時）
 本月二十一日「スバヌ・チヤンドラ・ホース」氏自由印度政府
 府ヲ獨立シタルニヨリ帝國政府ハ本二十三日右自由印度政府ヲ承認シ
 區ニ此ノ旨ヲ通告セリ

○帝國政府聲明
 今般「スバヌ・チヤンドラ・ホース」氏ヲ王位トスル自由印度
 政府ノ成立ヲ見タル處帝國政府ハ右カ印度人多年ノ奮闘タル
 獨立印度完成ヘノ一大進歩ナルコトヲ確信シ之ヲ自由印度政府
 府トシテ承認シ其ノ目的達成ノ努力ニ對シ有クニ力ニ支持ス
 為スヘキコトヲ茲ニ聲明ス

外務省

戊

増補箇所

大臣

次官

政務局長

政二改五人事
各課長別件通件

條約三編長

條約三編長

戊

自由印度假政府ニ對シ與ヘタル承認ニ關シ外務省部ヘノ應酬振ニ關スル件

條約二編十九、十二、二十

○擬問 義ニ「ボース」ヲ首班トスル自由印度假政府ノ成立ニ際シ帝國政府ハ客年十月二十三日之ヲ自由印度假政府トシテ承認スル旨聲明シタルガ右承認ノ性質如何

○擬答 帝國政府ノ右聲明ハ國際法上ノ所謂政府ノ承認ノ性質ヲ有スルモノナリ

○擬問 國際法上ノ政府ノ承認ト謂フハ當該政府ガ國際法上ノ主權タル一ノ國家ヲ代表スル資格ヲ有スルモノナルコトヲ正式ニ認ムルコトナルベキガ自由印度假政府ハ如何ナル國家ヲ代表スルモノナリヤ

○擬答 自由印度假政府ニ認リ代表セラルベキ國家ハ目下完成ノ上ニ在ル獨立印度ナリ

外務省

大

増補セシ部分

詳細別添
参考資料

○擬問 獨立印度ハ未ダ領土ヲ有セザル處領土ヲ有セズトモ之ニ國家ノ觀念ヲ與ヘ得ベキヤ

○擬答 獨立印度ハ未ダ領土ヲ有セザルモ完成ノ途上ニ在ルモノナルコトハ事實ニシテ近キ將來ニ於テ領土ヲ獲得スベク且少ナクトモ客年十一月六日大東亞會議ニ於ケル東條内閣總理大臣ノ聲明ニ於テ帝國ハ印度獨立ノ第一階梯トシテ目下帝國軍ニ於テ占領中ノ印度領タル「アンダマン」諸島及「ニコバル」諸島ヲ近ク自由印度假政府ニ歸屬セシムル用意アル旨明ラカニセラレタル次第モアルニ付遠カラズ或ル範圍ノ領土保有ヲ期待シ得ベク戦時ノ特例トシテ自己ノ領土ヲ追ハレタル所謂亡命政權ナルモノ一應國家トシテ觀念シテ然ルベシ

○擬問 新ニ成立セル

外務省

(日本標準規格B5)

政府（又ハ假政府）ニシテ其ノ固有ノ領土取得以前ニ政府トシテ承認セラレタル事例アリヤ

擬答 前同ノ歐洲大戰中ニ於ケル「チェッコ・スロヴァキア」國ノ獨立ニ際シ同國ガ一應ノ領土的基础ヲ有スルニ至リタルハ一九一八年十一月十四日（此ノ日「ブラーグ」ニ召集セラレタル國民議會ニ於テ「チェッコ・スロヴァキア」國共和國ノ成立ヲ宣言スルト共ニ「マサリツク」ヲ大統領ニ選舉シ正式政府ヲ組織ス）ナルガ、之ニ先立チ同年十月巴里ニ於テ「チェッコ・スロヴァキア」假政府ナルモノ組織セラレルヤ十月十五日佛國ヨリ、同月二十四日伊國ヨリ政府ノ承認ヲ受ケタル事例アリ

外務省

(日本標準規格B5)

○擬問 自由印度假政府ノ承認ガ政府ノ承認ノ性質ヲ有スルモノナラバ之ニ對シ直チニ正式ノ常駐使節ヲ交換スルコトトシテハ如何

擬答 政府トシテ承認スルコトノ結果直チニ正式ノ常駐使節ヲ交換セザルベカラズトノ理由アリシ、獨立印度ノ被選ノ候補ヲ見ルル上正式ノ常駐使節ヲ交換スルコトト致シ度

○擬問 獨立印度完成ノ際擬メテ國家ノ承認ヲ安ムルヤ、府又現在與ヘタル以府トシテ承認カ國家ノ承認ヲ包含ムモノナリヤ

擬答 獨立印度ハ一應理念トシテ存スルモ他國兵ノ其ノ範圍等ハ明確ナラザル次第モアルヲ以テ獨立印度完成ノ際ニ更メテ之ニ國家トシテ承認ヲ與フベキヤ否ヤハ其ノ時ニ於ケル情勢ニ依リ決定スベキモノト認テス（一旦「タ」承認ヲ後日更メテ承認スルノ手續ヲ取リタル事例トシテハ一九一九年主權同盟及聯合國「チェッコスロバキア」國トシテアリ）

外務省

戊





「チエフコ・スロヴァキア」國ノ獨立承認

十九、十二、十一 條約二課

「チエフコ・スロヴァキア」國形成ノ経緯

(1) 一九一六年ノ初頭「マサリク」ヲ會長トセル「チエフコ・スロヴァク」國民評議會 (National Council) 組織セラルレ其ノ本部ヲ巴里ニ置キテ獨立國建設ノ主張ヲ世界ニ訴フルト同時ニ獨逸ニ反抗シテ「チエフコ・スロヴァク」軍隊ヲ編成シ、佛伊、露等ノ威嚇ニ於テ同盟及聯合國諸國ト協力セリ。

(2) 右國民評議會ハ一九一八年九月末ヨリ巴里ニ「チエフコ・スロヴァク」假政府ナルモノヲ組織シ十月十四日附ヲ以テ各國ニ右假政府ノ成立ヲ通知スルト共ニ「マサリク」(大統領、首相兼藏相) 以下ヲ關係ニ任命シ又夫々倫敦、巴里、羅馬、華府及蘇國ニ於ケル其ノ代表者ヲ任命シタリ。

(3) 他方埃洪國內ニ在ル獨立運動者ハ一九一八年七月「ブラーグ」

外務省

戊

ニ「チエフコ・スロヴァク」國民委員會 (National Committee)

(1) ナルモノヲ組織シ外國ニ在ル同志ト連絡シテ活躍中ナリシガ同年十月二十八日遂ニ「ブラーグ」ニ革命政府ヲ樹立シ國民委員會ハ爾今「政府」ト稱スル旨ヲ聲明シ巴里ニ在ル假政府ト協力シテ國民委員會ノ代表者ガ「ジュネーヴ」ニ於テ在巴里假政府代表者ト直接ノ連絡ヲ結ビ「ブラーグ」ニ歸還シタルハ十一月五日ナリ。數日中ニ「ボヘミア」「モラヴィア」「シレジア」「スロヴァキア」ノ諸地方ヲ其ノ支配下ニ置キ同年十一月十四日「ブラーグ」ニ召集セラレタル國民議會ニ於テ「チエフコ・スロヴァキア」共和國ノ成立ヲ宣言スルト共ニ第一閣ノ大統領トシテ「マサリク」ヲ選舉シ同時ニ正式政府組織セラレタリ。

外務省

帝國政府ノ「チェッコ・スロヴァキア」國承認

(1) 大正七年（一九一八年）八月十一日在巴里「チェッコ・スロヴァキア」國民評議會理事長ヨリ同評議會ノ名ヲ以テ在英帝國大使ヲ通シ同民族ノ過去及現在ニ於ケル反獨逸的勢力ヲ述ヘ聯合國側諸國ノ同情アル態度ヲ指摘シ西比利亞出兵ニ於ケル日本ト「チェッコ・スロヴァキア」車トノ關係ヲモ尋ゲテ日本政府カ同年八月九日附英國政府ノ宣言同様（前記二、(1)参照）其ノ態度ヲ宣明センコトヲ懇請シ來レルニ對シ、帝國政府ハ同年九月九日附ヲ以テ在英帝國大使ヲシテ右來信ニ對スル回答ノ形式ヲ以テ「チェッコ・スロヴァキア」車ヲ獨逸ニ對抗シテ正規ノ戰鬥ニ從事スル聯合國父戰軍ト看做シ右國民評議會カ該車ヲ統理スルノ權限アルコトヲ承認スルノ懸望ヲ宣言セシメタリ。

(2) 其ノ后同年十月十七日附ニテ右國民評議會ヨリ發展シタル在巴里「チェッコ・スロヴァキア」假政府外務大臣ノ名ヲ以テ假

外務

極秘

主管 南政

昭和19 七十七七六 暗 西貢 十二月二十六日一八五〇發
七十七八四 本省 二十六日二五〇着

重光大東亞大臣

塚本學務所長

第一三二一號

(印度假政府軍資金輸出ニ關スル件)

印度假政府軍ノ當地ニ於ケル軍資金募集ニ關シテハ佛印當局ハ之ニ
協力セル印度人ニ對シ極力課税ヲ課シ又ハ商取引其ノ他ニ籍口シテ之ヲ
逐捕スル等合法的ニ嫌カラセラヌ一方我方ニ對シテ尙其ノ募集方
法ハ日本軍ノ威嚇ヲ懸ルロト多シトテ我方ノ注意ヲ喚起シ來タリ居
リシ處先般「チャンドラボース」當地立寄ノ假會ニ開催セラレタル
當地在留印度人ス曾ニ於テ「ボ」ハ軍資金輸出ノ爲其ノ佛印籍ヲ有
スルト否トヲ問ハス印度人一同ニ課金ヲ行フ様態恣シ印度獨立ノ既
ニハ在印佛領殖民地ヲ奪回スルハ勿論右領地在任ノ佛人ノ權益

東京 四三七

電信寫

極秘

大東亞省

財産ハ沒收スヘキニ付佛側ニ氣兼スル要ナキ旨述ヘタル趣ナリトテ
本月當地日佛連絡係ヨリ佛印總督府ノ名ヲ以テ當大使府ニ對シ印度
假政府ノ斯ル行通ヲ反省セシムル様態旋方申越セリ依テ本官ヨリ右
ハ獨立政府ノ爲シタルコトニシテ當大使府ヨリ何等容喙スヘキ筋合
ニアラス事口佛印側カ自己ノ主權ニ基キ取締レハ足ルヘキ旨答ヘタ
ルニ對シ連絡部長ハ印度人ノ脅迫カ恐シキヲ以テ日本側ニ依頼スル
次第ナリト述ヘタルヲ以テ本官ヨリ然ラハ近々日本側ヨリ印度假政
府ニハ使節ヲ駐派スルコトナルヘキニ付右使節當地通過ノ假會ニ
貴方ノ要望ヲ取次クコトト致スヘシト答ヘ置キタリ
河大へ轉電セリ

電信寫

東京 四三七

Czech Parallel

Viewed from the standpoint of International Law, the Provisional Government of Free India resembles the National Congress and, its successor, the Provisional Government of Czecho-Slovakia established during the First World War. The Czecho-Slovakian National Congress was organized with Dr. Masaryk heading it in the early part of 1916 with its headquarters established at Paris. It appealed to the moral support of the world for its aspirations for the establishment of an independent Czecho-Slovakian State. This organization also created a Czecho-Slovakian army which cooperated with the Allied and Entente forces on the German and Austrian fronts. In the summer of 1918, the Allied nations extended recognition to the Czecho-Slovakian National Congress, as the supreme organ of the Czecho-Slovakian people, and its army, as a belligerent army on the Allied side. When this National Congress created a Provisional Government at Paris at the end of September, the same year, and notification of the same was sent to the Powers, both France and Italy formally recognized the newly created government. Another independent organ was created in Austria and Hungary and was amalgamated with the Provisional Government later on. On November 14, 1918, the National Parliament, convened at Prague, announced the creation of the State of Czecho-Slovakia. Masaryk was elected the first President of this nation and a formal government was then organized.

Immediately after the Japanese Government's announcement of its recognition of the Provisional Government of Free India, Bose came to Tokyo on October 31 to convey his gratitude for the cooperation shown his government by the Japanese Government. He attended the Assembly of East Asiatic Nations which was held in Tokyo on November 5 and 6 in the capacity of an observer. At the meeting of the Assembly on the sixth, Dr. Ba Maw, Burmese Prime Minister, proposed after the adoption of the Joint Declaration by the Assembly that the Assembly declare itself in favor of giving its wholehearted support to Bose in his attempt to emancipate India together with the Indian National Army as the head of Provisional Government of Free India. After the adoption of this motion for support, Mr. Bose rose to thank the Assembly for his unanimous decision on this motion.

First Territory Set

Then, former Prime Minister General Hideki Tojo, the Japanese delegate, made the following announcement in connection with Dr. Ba Maw's motion and the speech of the head of the Provisional Government of Free India: "The Imperial Japanese Government has repeatedly announced its intention of giving support to all movements for the emancipation of India from the Anglo-American yoke and for the realization of this aspiration. In view of the fact that the firm foundations of the Provisional Government of Free India have been laid down and because of the growing patriotic endeavors and unity of purposes on the part of the Indians who are now working towards their national independence under the Provisional Government, I have the honor of declaring herewith that Japan is prepared to return shortly to the Provisional Government of Free India the Andaman and Nicobar Islands which are now under Japanese occupation as the first step toward the realization of Indian independence."

At the time of the advance of the Japanese Forces into India in the spring of 1944, the Imperial Headquarters announced on March 23 that our Army, together with the Indian National Army, had entered Indian territory in the middle of March. Further communiques of the Imperial Headquarters on March 31 and April 8 also stated that our Army together with the Indian National Army had been engaged in operations.

On the occasion of this advance into India, Bose issued a second statement on April 4, in which he declared that the Indian National Army, under the direction of the Provisional Government of Free India, which was established at Shonan on October 21, 1943 by 3,000,000 Indians, had penetrated far into Indian territory after crossing the Indian frontier; that the Provisional Government is the only legal Government of the Indian people, and that the Provisional Government requests the Indian nationals in the liberated areas to extend their cooperation and assistance to the Indian National Army and to all administrative officials appointed by the Provisional Gov-

ernment.

Joint Armed Effort Pushed

Later, on October 15th, Prime Minister Tojo referred in his speech at the meeting of the Mixed Committee, based on the Tripartite Treaty among Japan, Germany and Italy, to the Indian problem, and declared that the Japanese Army, together with the Indian National Army, had crossed the Indian border and had marched into Indian territory; and that the fact that the Indian National Army, under the command of Bose, has been fighting for the emancipation of India with the support of Burma and other member States of Greater East Asia. He said that, with this, an opportunity for India's emancipation had presented itself, and that our objective of freeing the oppressed peoples was about to be realized.

On November 1, Bose arrived in Japan in order to consolidate the close relations existing between the Provisional Government of Free India and Japan, and also to exchange views with the Japanese Government and military leaders. We have already noted that, as a result of this, the Japanese Government decided to send a diplomatic envoy to the Provisional Government. Regarding this, the Board of Information issued the following statement on November 26: "Following conversations, carried out between Subhas Chandra Bose, head of the Provisional Government of Free India, who has been staying in the capital, and the leaders of the Japanese Government, regarding the prosecution of the Greater East Asia War and means for promoting collaboration between the two governments, the Imperial Japanese Government has decided to dispatch a diplomatic envoy to the Provisional Government."

On the same day, Bose issued a statement in which he said, "It is a source of great joy for me to observe that formal diplomatic relations have been established between the Japanese Government and the Provisional Government of Free India and that the Japanese Government has decided to dispatch a diplomatic envoy to our Provisional Government."

This diplomatic envoy is to be installed by virtue of Imperial decree Number 64, promulgated in 1917, which provides that, in case of the necessity of dispatching a diplomatic official abroad, in order to execute a special duty, a temporary extraordinary Ambassador or Minister may be installed until the execution of such duty may be completed.

PROVISIONAL GOVERNMENT OF FREE INDIA

Conditions Leading to Its Formation Reviewed

By MANRI FUJISAKI

The Japanese Government has decided to dispatch a diplomatic envoy to the Provisional Government of Free India as a concrete measure of promoting cooperation and friendly relations. This decision was made by the Japanese Government on the occasion of the recent visit here of Subhas Chandra Bose, President of the Provisional Government. I shall take this opportunity to review the various events that have occurred since the establishment of the Indian Provisional Government on October, 1943.

The Provisional Government of Free India issued a declaration of its establishment on October 21, 1943 on the occasion of an assembly at Shonan of East Asian delegates of the Indian Independence League in East Asia. Prior to this assembly in July the same year Bose went to Shonan to assume leadership of the Indian Independence League and the position of Commander-in-Chief of the Indian National Army. At a plenary session of the assembly of the delegates of the Indian Independence League on the afternoon of October 21, Bose presided the inauguration of a Provisional Government for Free India. His motion was unanimously supported by all the delegates present and the assembly promptly elected Bose as President of the Provisional Government. After Bose had taken the oath as the head of the newly established Government, its organization and other important matters were decided by the assembly and the first declaration of the Government was promulgated. Thus, the Provisional Government of Free India came into being.

The declaration of the newly inaugurated government in part said: "With the approach of the emancipation of our fatherland, the Indians have the task of establishing their own Government and of commencing their last fight under its direction. In view of the fact that the leaders are all being imprisoned and our brethren in our native country have been deprived of arms, it is impossible to establish a provisional government, within Indian territory, to direct our struggle. Thus, the Indian Independence League in East Asia must take up this task with the aid of the patriots within and without our country. . . . The task of

the provisional government is to commence a struggle in order to bring about the complete expulsion of Britain and her allies from Indian territory and to guide this struggle. The provisional government also has the duty of establishing a free and permanent national government which shall be based on the will and trust of the Indian people. The Provisional Government shall carry out its national affairs with the confidence of the people until a permanent and free Indian government is established on Indian soil." Thus, did the declaration clarify the combative and transient character of the newly established provisional government.

Simple Organization

Due to this provisional nature of the Indian government, its organization is simple. It is composed of the Military, Foreign Affairs, Finance, Propaganda and Women's Affairs Departments, all under the direction of the head of the Government. The direction of the Military and Foreign Affairs Departments were concurrently held by the head of the Government. There are several Ministers Without Portfolio and several Cabinet Advisers.

The Indian National Army was placed under the Provisional Government and the supreme direction of Bose. The Indian Independence League continued its activities in cooperation with the Government in order to stimulate the Indian National Movement. The Provisional Government was to be located within Burma.

On October 23, 1943, the Imperial Japanese Government announced its recognition of the newly created Provisional Government of Free India. The statement of the Japanese Government is as follows: "Firmly believing that the newly established Provisional Government of Free India with Mr. Subhas Chandra Bose as President makes a great advance towards the complete realization of an independent India, which has been the aspiration of the Indians for many years, we hereby announce that we shall extend recognition to the Provisional Government of Free India and to accord it all conceivable cooperation for the attainment of its objects." The Board of Information also issued a statement regarding the above announcement. On the same day Burma also recognized the Provisional Government. This was followed by the extension of recognition by Germany on October 28, the Philippine Republic on October 29, China and Manchoukuo on November 1, Italy on November 2, Thailand on November 17 and Croatia on November 19.

日本タイムズ 昭和二十六年六月十二日

